仮面ライダークウガ-New Hero Unknown Legend-

青空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダークウガ－Ｎｅｗ　Ｈｅｒｏ　Ｕｎｋｎｏｗｎ　Ｌｅｇｅｎｄ－

【Ｎコード】

Ｎ２１８３Ｑ

【作者名】

青空

【あらすじ】

未確認生命体第４２号を、怒りと憎しみの心で倒してしまった第４号－クウガ。

目覚めるはずのなかった力がその動きを見せた時、もう一つの封印されていた『目覚めるべきでなかった力』が目を覚ます。

そして始まる、最も哀しい戦い。

それに雄介は、一条は、人々はどのように立ち向かうのか。

笑顔を守る戦士、クウガが導いた答とは…？

EPISODE0　覚醒

とある病院の敷地内にて、人だかりが出来ていた。病院で中庭と呼ばれる場所で、制服を着た複数の警官隊が装備している拳銃越しに、中央にいる２つの生物を取り囲んでいた。

一方の生物が、もう一方の生物に馬乗りし、その拳を幾度となく相手にぶつけていた。ぶつけられる方は為す術もなく、その拳の餌食となっていた。

その２つの生物は人間ではなく、現在世間を最も騒がせている存在、『未確認生命体』だった。

馬乗りされている未確認生命体は、人間と同様に例えるなら漆黒に近い黒い肌と青白く鋭い瞳を持っており、最も特徴的な髪に当たる部分は白く逆立っており、簡単に人間を傷つけられるほど硬質に見える。

まるでヤマアラシが人間の姿になったかのような容姿を持つそれを、警察や世間では未確認生命体第４２号と呼んでいる。

一方、第４２号に拳をぶつけている生命体は上半身の大半が赤い装甲に覆われており、頭部はクワガタ虫のような天に向かう２本の金色の角と体を纏う装甲のように赤くて大きな眼がある。

手首や足首にある金色の装飾品らしき装備には、その姿を印象づける赤色の宝石らしきものが埋められいる。

そして、腰のあたりには最新の科学力をはるかな上回っていそうな技術で作られたベルトを巻き付け、その中心にある大きな宝石はや

はり赤色だった。

その生命体は未確認生命体第４号、またはクウガと呼ばれ警察と共に幾多の未確認生命体を倒してきた、人間の味方と呼べる存在だ。

その人間の味方である４号が、自我を失ったかのように４２号を殴り続けている。４２号が口から吐いた血がついた真っ赤な拳を、いつまでも振るい続けていた。

「うあぁぁぁ！！」

絶叫する４号。生身の人間なら一撃で絶命してしまうであろう威力の拳を振るうことに、今の４号には迷いがなかった。

「うあぁぁぁ、う、うあぁぁぁ！！」

殴る。

殴る。

殴る。

このまま４２号の息の根をとめてしまいそうな拳の勢いを、４号はさらに加速させていく。

その光景を、その場にいる全員が身動きもせず、凝視していた。

否！全員が恐怖を覚えていた。

これでは『未確認生命体を倒す』と言う正義のための行動ではなく、『他の生命を殺す』と言った冷酷な行動と言ってもおかしくない。

立ち竦む警官隊は、恐怖で支配された精神の中に唯一残った冷静さでそのように捉えていた。

「うあああぁぁ！！」

とどめと言わんばかりに、４号が大きく拳を振り上げた。その隙をついて４２号が体を回転することで振り下ろされた拳を回避した。

空振りした拳は４２号が直前までいた場所にたたき込まれる。しかし、４２号に対する衝動が抑えられない４号は、その場から逃げようとフラフラ歩き出した４２号に追いつき、再び拳を何度もぶつけ始めた。

４２号を壁まで追い込み、もう一度相手を殴ろうとする。４２号はなんとか両手でそれを防ぐが、４号のさらなる追撃により、大きく吹き飛ばされてしまった。

その瞬間を見計らい、４号は停車したバイク―ビートチェイサーに向かう。それに乗車すると、ハンドルに備えられた数字盤を操作する。白と青が基調だったバイクのシルエット黒と赤と金のそれに変わると、彼方から黒い装甲をまとった昆虫のような飛行物体―『ゴウラム』が飛来する。

ビートチェイサーの上空にきたゴウラムは自身を2つに分け、４号が乗っているそれに付着する。以前に解読された古代文字から『馬の鎧』と称されたそれは、まさにビートチェイサーという馬がまとった鎧に相応しい姿だった。

ゴウラムが付着したビートチェイサー―ビートゴウラムは猛烈な勢いで発進し、牙にあたる部分でふらついた４２号をかつぎあげると、さらに加速し、病院から離れ始めた。

「ぐ、うぅ…」

ビートゴウラムによって運ばれる４２号が苦しそうな声をあげた。視界に映る４号の気迫は、先程から放っている以上の濃密さとなっていた。

このままではマズいと感じたのか、４２号が胸にぶら下げていた装飾品を引きちぎった。すると、それは鋭い針となり４２号は４号の体に突き立てようとした。

しかし、４号はそれを見透かしていた。

「超変身！！」

赤い装甲が紫色に変わる。

全身の装甲がより強固なそれとなり、４２号の攻撃を完全に弾き返す。ビートゴウラムの上というのにも関わらず４２号を殴りつける。

それが何度か繰り返した後、４号の視界が広くなった。車道の両側に生い茂っていた木々がなくなり、一面が海になったのだ。

それを確認した４号は、ビートゴウラムを急停車させた。慣性の法則により、吹き飛ばされた４２号はそのまま海面に叩きつけられた。

そのようなことに目もくれず、４号はビートゴウラムのドライバーを引き抜く。するとドライバーはその姿を紫色の巨大な剣へと変わる。

そして、４号がゆっくりと４２号に向かって歩き始めた。

「ヒッ……！」

向かってくる４号に言いしれない恐怖を覚えた。装飾品を針に変え、それを投げつけて抵抗するが紫色の４号には傷一つつかない。

ベルトの宝石の部分から雷のような電気が流れ、全身をより鮮やかな紫色と金色の装甲に変わり、携えていた剣はさらに鋭く、強力なものになった。

それを見た４２号は死に物狂いで４号から逃げようとするが、２体の距離はさらに縮まっていく。

「フゥ…フゥ…」

荒い息遣いが４号から漏れる。

その脳内に、様々な人物達の映像がフラッシュバックしていく。

４２号により、命を奪われた人達。

その人達の死により、涙を流した人達。

「フゥ…フゥ…」

その行為を続ける理由を４２号は、こう言った。

『君達が苦しんでいる姿を見るのが、楽しいから…』と。

「フゥ…フゥ…」

４２号への憎しみが。

これまで募ってきた未確認生命体への感情が。

自分の中でどす黒く、大きな何かへと変わっていく。

「フン！フッ！ダァ！」

手に持っていた剣で４２号を何度も切り裂く。切り裂いた箇所から赤い雷のような閃光が放出される。

剣を振るうたびに。

切り裂くたびに。

溢れてくるどす黒い何かは、その濃さを増していく。

そして、とうとう４２号が倒れた。しかし、４号は間髪入れずに…。

「うおりゃあああぁぁぁぁぁ！！」

大剣を、４２号の腹部に突き立てた。

先程よりも、強い光が２人を包み込む。そして、耐えきれなくなっ

た４２号は、大爆発を起こした。

ーＰＭ？？？？？？　場所不明ー

遠くの方で、大きな力を感じる。

それは、雷のように強大で。

漆黒の闇のように黒く、果てしなく深い。

平和という言葉を簡単に飲み込んでしまう、嵐のような力。

目覚めるはずのなかった力が、その片鱗を現したのだ。

その片鱗を敏感に感じ取ったそれは、かすかに動き始めていた。

動き始めたそれもまた、目覚めるはずのない存在だった。

それらは互いを引き寄せるかのように、長い年月を経て再び動き始める。

『ウオオォォ……！！』

もうもうとあふれ出す紅い靄の中から、空気が張り裂けんばかりの獣のような声が兒玉する。

誰にも気付かれないような場所で、まだ誰も知らない滅びの予兆が始まろうとしていた。

EPISODE1　揺信

―群馬県山間部　PM19：22―

一台の自動車が、日の暮れた山の道路を走っていた。

運転席、助手席、後部座席に座る青年2人と少女2人を乗せた車は交通規制を受けていない道路を猛スピードで駆け抜けていく。乗車マナーを守る気の片鱗さえ見せない4人の気分は非常に高揚しており、そんな車内はお祭り騒ぎだった。

人も対向車も通らないことを良いことに、車は速度を落とさぬまま、カーブにさしかかる。

その時…。

「うおっ！！」

運転手の青年が急ブレーキをかけ、車は大きく揺れながら停車した。

「おい、なんなんだよ、いきなり…」

「どうしたの？」

「何かあった？」

口々に運転手の青年に話しかけてくる他の男女。すると運転手の青年はあわてた様子で辺りを見回しながら答えた。

「今、車の目の前に、誰かが…」

青年の発言に高揚していた車内の雰囲気が一気に冷めきった。

他の男女も車から辺りを見回すが、青年の言った人影などどこにも見当たらなかった。

「どこにもいないよ？」

「見間違えじゃないか？」

周囲が暗いため、そう判断するのが妥当だった。別の青年の一言に運転手の青年は素直に同意した。

「早く行かない？なんか気味悪いよ……」

周囲を見回し、後部座席の女子が少し青い顔をしながら言う。

車のヘッドライトがなくなってしまえば、完全に暗闇の一部と化してしまうであろうその場所の暗さは、言いようの知れない不気味さがあった。

少女の一言がきっかけで、その暗闇の不気味さが車内に浸透していき、車内の空気がより一層冷たくなる。

「そうだな、さっさと行くか……」

運転手の青年がエンジンをかけようとする。が、先程の急ブレーキで何かおかしくなったのかエンジンがかからなかった。

「おかしいな」と言いながら、青年は車を降りて、車の前方に向かいボンネットのカバーを持ち上げようとした。

その瞬間、青年がカッと目を見開いた。顔色はみるみる青白くなり、過呼吸を起こしたかのように荒々しく呼吸を繰り返す。それらの行動に加え、左手で首をおさえる行動をとる彼の様子は尋常ではなかった。

青年の様子がおかしくなったのを見て、車内のメンバーに動揺が走った。脳内の処理が追いつかない中、ボンネットに置いた片手で自身を支えていた青年が、とうとう地面に倒れ込んだ。

「おい、どうした！？」

「大丈夫！？」

車から降りた青年らは、苦しんでいる青年に声をかけ、青年のもとに駆け寄る。地に倒れ伏している青年の喘ぎ声が不気味かつ生々しく暗闇に響きわたっていた。

「カ、ガァ…ア…カハ…」

「おい、しっかりしろ！！」

「どうしたの！？」

「ねぇ、何があったの！？」

口々に叫ぶ青年らの呼びかけも虚しく、運転手の青年の顔色はますます蒼白となり、口から漏らす喘ぎ声の力も次第に抜けていく。

運転手の青年以外の青年らは、混乱し、そして目の前で青年が苦しんでいる様を見続けるしか出来なかった。

そして、青年の喘ぎ声が止まった刹那…。

生々しい音が、その空間に振動を与えた。

そして、次の瞬間には運転手の青年以外のメンバー全員の悲鳴が山の中全域に響き渡っていた。

ー警視庁　第一会議室　ＡＭ９：３２ー

複数の長机がコの字型に綺麗に並べられた一室には、十数人の刑事達が集まっていた。会議に出席する刑事達は皆、その厳粛な空間に触れ、引き締まった表情をしている。

その場にいる一人一人の放つ雰囲気が、空気をピリピリと張り詰めたものにしていた。

「では、これより未確認生命体対策会議を始める」

コの字型に並べられた机から離れた場所に設置された長机のイスに座った対策班のまとめ役の男性ー松倉　貞雄が静かに話し始める。

議論の内容は、未確認生命体第４２号がもたらした被害も含めてのこれまでの彼らの行動について、だ。

この議論では、これまで未確認生命体がどのような手法で人間に襲いかかるかの他に、彼らの活動範囲と習性、未確認生命体を倒してから新しい未確認生命体が活動を始めるまでの期間などを、現場の前線で働く側、科警研側からの意見を総合するためのものだ。

これから出現する未確認生命体による被害を０にするために必要な武器、警備体制などを確認し合うのはもちろん、法則性のあるゲームを開始した未確認生命体の行動性を速く、確実に判断し、人々の安全を確保する方法を、それぞれの立場からの見解をぶつけあうことで、無駄のない最良のものを導くための場である。

時が経つごとに強力になっていき、人間の中に溶け込んでいく未確認生命体に、どのように立ち向かうか。

その解答を出すのには、それに立ち向かう大勢の人間と、彼らによる膨大な量の意見のぶつけ合いが必要と警察上層部は判断を下した。

故に未確認生命体対策会議は以前にも増して頻繁に行われるようになり、その度に対策を最高のレベルにしてきたのだ。

「では、今回の会議はこれにて終了する。他に報告がある者はいるか？」

今後の方向性が決まったところで、松倉がたずねた。

「はい」

会議室の後ろの方に着席していた刑事が手を挙げた。まだ若い年齢の青年であり、少し苦しそうに着ている新品で固めのスーツがます

ますそれを印象づけている。

未確認生命体合同捜査本部に新しく配属された新米刑事の青年だ。

「報告と申しますか、質問が１つございます」

「なんだ？」

「未確認生命体第４号への対応については、何も決定しなくてもよいのでしょうか？」

青年の質問が、張り詰めた空気に波紋を生んだ。中でも、未確認生命体第４号ークウガのことをこの場にいる誰よりも理解しているであろう刑事ー一条（いちじょう）　薫（かおる）は質問した刑事に怪訝そうな表情を向ける。

「と言うと、どういうことかな？」

松倉が、その場を静めるように切り出した。

「味方であるはずの４号が４２号と戦っている際の４号の戦い方が、どうしてもただ殴っているようにしか見えなかったんです。まるで、自身の恨みをただぶつけているように感じました」

青年の言葉に、会議室内はシンと静まり返っていた。とくに前線で戦っていた刑事達は、４２号と４号の戦いを思い出し、何人かは青年の刑事に同意しているように見えた。

「そればかりではなく、４号の力が大きくなってきたことに、一部の報道では４号の闘争本能について恐怖しているともあります。４号もその本能に従って他の未確認生命体のように我々を襲うのでは

ないでしょうか？」

「……」

誰もが静まっている中、一条は心中穏やかではなかった。戦友であり、親友である４号が倒すべき未確認生命体と同じように見られているのだ。

そのように見るのは新米の彼だけではなく、合同捜査本部に配属され、長期間経った者も同じように見始めているように感じる。

それが一条には、耐え難かった。

「君の意見も、よく判る。だが、それについては現段階では考慮しなくていい」

松倉が、再び乱れ始めた場をなだめるように言う。

「しかし…」

「ただし、だ。今後も４号が他の未確認同様、本能に身を任せた戦闘を繰り返し、我々に危害を与える存在になりかねないと判断した場合は、殲滅すべき対象に４号も含める。それでは、ダメかね？」

反論しょうとした青年を抑え、言葉を続ける松倉。青年の意見を否定せず、かつ現段階で出せる最良の案に、青年は大人しく引き下がった。

「では、これにて会議を終了する。全員各自の持ち場につき、次の指令を待機するように。解散」

「はい」という返事を全員がしたことにより、会議室内の張り詰めた空気がなくなった。会議に参加していた人物達がゾロゾロと会議室から出て行く中、一条だけは座席からまだ立ち上がっていなかった。

「よう」

そんな一条に一人の刑事が話しかけた。

杉田（すぎた）　守道（もりみち）。

一条の次に4号を深く理解、信頼している人物だ。

「杉田さん…」

「さっきの会議のことか？」

空いている席に腰をおろしながら、一条に話しかける杉田。

彼の問いかけに一条は無言だった。しかし、その反応が杉田の言葉が正しいことを証明していた。

「まぁ、俺も最初は『未確認生命体は倒すべき敵だ』って思ってたからな」

彼の言う通りである。

本来、未確認生命体もクウガも現代には存在しないはずの存在だった。そんな存在がいきなり現れるばかりでなく、人間に襲いかかってくるのだから、敵対心を持つのは当然だ。

４号の最大の理解者である一条もかつてはその一人だったのだから、まだ未確認生命体の事件に深く関わっていない新米刑事の青年の気持ちはよく分かる。

だが、話は単純なものではなかった。

「しかし、他の連中まで疑うようになるとはな」

４号に対する不信感は青年だけでなく、未確認生命体合同捜査本部に長い間所属していた刑事達もが抱いていた。

一条や杉田、松倉などのように４号に変身する人物との関わりが多くなく、彼の人柄を彼らがよく知らないことも、彼らの信頼を揺らがせることを助長しているのだろう。

その事実を極端にとらえるなら、今では必須となっている４号との連携戦術に歪を生じさせ、今後の戦いで更なる被害を呼び起こす可能性が生まれることを示唆している。

それほどまでに、前回の４号の戦闘は荒々しく、凶暴だったのだ。

『悔しいです…何で何も出来なかったんだろうって…』

一条は、４号の姿に変身する前の親友の姿を思い出した。

救えないことが悔しくて。
涙を見るのが辛くて。
何も出来ないことが許せなくて。
そんな思いが、親友の中にずっとたまっていたのだ。
「まあ、でも……俺達は4号のことを、五代(ごだい)くんのことをよく知っている」
まるで独り言のように呟く杉田。しかし、一条に向けたそれは、一条の心境に安心感をもたらしていた。
「こういう時だからこそ、五代くんのことを信じてあげなきゃいけないよな」
「…えぇ、そうですね」
4号ー五代(ごだい)　雄介(ゆうすけ)はこれまで、誰かの笑顔のために命がけで戦ってきた。
そんな彼を、彼のことを心の底から信じている自分が支えてあげなければならない。
一条はそのように思った。
「一条さん、杉田さん」
会議室にいる2人の名を、部屋に入ってきた刑事ー桜井(さくらい)　剛(つよし)が呼んだ。

「出動要請が出されました。すぐ来て下さい」

突如出された出動要請に2人の顔色が変わった。どこにでもいる人間のそれから、犯罪者を逃すことなく見つけ出す刑事のそれへと一瞬に切り替わっていた。

「分かりました」

人間は人間として、人間に出来ることを。

雄介は人間として、雄介に出来ることを精一杯しながら皆の笑顔を懸命に守ろうとしている。

そんな人間を支えられるのは、やはり人間の自分であると、一条は知っていた。

人間である自分や大勢の人達を未確認生命体から救ってきたのは、人間である雄介だったから。

「（俺も、支えてやるからな…）」

戦士クウガとして闘う彼もまた、一人の人間である。そんな彼を人間として、親友として、一条も支えたいと思ったのだ。

そのために出来ることを、精一杯やる。

一条は、そう思いながら捜査に向かう。

未確認生命体と闘う、彼と雄介すらも知らない伝説が今、静かに始まろうとしていた。

EPISODE2　異変

ＡＭ８：３６　文京区内　ポレポレ

媒染機がボコボコと、コーヒーを沸騰させる音。

厨房にてグツグツと、自慢の味わいを持つカレーを温める音。

そして…

「やけ～に～やさしす～ぎたのは～いつかのゆ～めと～おもわせ～て～」

店内で明るい声で歌を歌う男性。店内に流れる明るくもあり、人々をなごませるピアノが主旋律の曲とは正反対の曲だった。

店の準備中ということもあり、店内は彼一人であるためか、そんなことに気を留める様子もなく、歌の盛り上がりと共にその気分を高めていく。

「そん～な～ふうに～おも～う～さみしさあふれ～る～ゆ…」

「おっちゃん、うるさい」

気分が高揚していた男性をバッサリと切り捨てるように、店の入り口から入ってきた少女ー朝日奈（あさひな）　奈々（なな）が言い放った。

「うっさいってなんだよ。人が気持ち良く歌ってる最中なのにさぁ

…」

「外にまで響いてんの。歌いたかったらカラオケに行ってきて」

外に響くほどの音量で歌われるのがよほど恥ずかしかったのか、奈々の言うおっちゃん一飾（かざり）　玉三郎（たまさぶろう）への態度はかなりきつかった。

「そうか、なら声を小さくして歌うかなぁ」

そう言うと、玉三郎は声を小さくして再び歌い出した。どうやら彼の中に歌うことを止めるという選択肢はないらしい。

「それより、おっちゃん。五代さん、いてる？」

奈々が、玉三郎に向かって訊ねる。

「雄介か…？」

玉三郎は、当店の目玉メニューとなっているケロンパカレー用の金箔を用意しながら応えた。毎度見る度に思うのだが、あの金箔は何で出来ているのだろう、と奈々は思う。人気メニューとなっているのだからお客さんには不満を与えていないようなのだが、どうも腑に落ちない。

「あいつは、確か今日病院に行くとか言ってたような…」

「え！？五代さん、どこか具合悪いん！？」

玉三郎の言葉を遮り、身を乗り出す奈々。雄介のことになると奈々はいつもこうなので、玉三郎は何も言わず、いつもの調子で応えた。

「あいつに限って、そんなことはないと思うんだけどなぁ…まぁ、

店前の掃除やってたし、普通にバイクに乗ってたし、問題ないだろ」
「おっちゃん軽すぎ！！五代さんが道端で倒れてたらどないすんの！？」
「道端って…そんな弱々しい奴じゃないだろ、あいつは。フラッと出て行くのはいつものことだし、いつも通り帰ってくるって」
とくに心配する様子もなく、温めていたカレーを味見する玉三郎。いつも通りの出来映えに気分をよくしながら、彼は再び歌を歌い始める。
「だから、歌うの止めてって言うてんのに…」
玉三郎の言葉に少々反感を覚えながらも、それに納得してしまった奈々は、店の中に流れ始めた奇妙な音楽に隠れるように小さなため息をついた。

ＡＭ９：１７　関東医大病院

「……」
「……」
静寂に包まれた診察室で、２人の男性が身動きもせず、あるものを凝視していた。１人は背後にいる男性の骨や内臓などの器官を映し出したレントゲン写真、もう１人はレントゲン写真を凝視する男性の背中だ。後者の人物にいたってはその表情を張りつめており、ひどく緊張した様子だった。
そんな時間が幾らか経った後、レントゲン写真を凝視していた男性

―椿（つばき）　秀一（しゅういち）がもう1人の男性―五代　雄介の方を振り向き、閉じていた口を開いた。

「ま、問題ないな」

「そうですか、よかった～」

椿の通告に対して、雄介は安心しきった様子で大袈裟にホッと溜め息を吐いた。

雄介が何故ここにいるかと言うと、新しいクウガの力―金の力が雄介の体にどのように影響しているかを定期的に調査するために椿が提案したことがきっかけだった。

クウガに変身する力を与える霊石―アマダムが埋め込まれたベルト状の物体―アークルを装着した雄介の体を診察した椿は、その異常性を見て当初から危惧していた。未確認生命体の体も解剖したことがある彼だからこそ、それに似た状態の雄介への危機感は強かったのだろう。その上、雄介は金の力という古代の碑文にない力を手に入れたのだ。ただでさえ、体にどのような影響を与えるかが解明されていないのに、これ以上、アマダムに変化があったら自身の警告だけでは追いつかなくなる可能性を考慮した椿はより期間を詰めた検診を提案した。

体への影響を感じなかった雄介もその提案には直ぐに賛成した。みんなの笑顔を守るためには、敵のことやクウガのこと、そして自身のことをもっと知るべきということを彼は重々理解していたからだ。もっとも彼がそれに素直に従うのは、未確認生命体が活動を停止しているときのみなのだが。

「金の力で何体か未確認生命体を倒してきたようだが、体は何とも

ないか？」

「全然大丈夫です！今朝の目覚めもバッチリでした！」

椿の問いかけに、いつも通りの笑顔で応える雄介。雄介が病院に訪れる際の恒例となったやり取りを経て、椿はいくらか安堵感を覚える。

第6号との戦いで重傷を負った雄介が椿の忠告を「大丈夫です！」の一言で出て行った前例があるため、彼が病院に訪れる度に体のどこかに異常があるのを無理矢理隠していないか考えてしまうのだが、未確認生命体との戦いが進むにつれ、雄介は体調管理にも気を遣うようになっていた。アマダムの変化などへの警戒は当分緩まれことはなさそうだが、こちら側の警戒は少し緩んでもよさそうだ。

「しかし、油断するなよ。いくらアマダムの力を使いこなしているとはいえ、それは完全にお前の味方ってわけじゃないからな」

アークルを見透かすように、雄介の腹部を見る椿。彼の視線につられて雄介も自身の腹部を見つめ、そこを軽くさすった。

「まぁ、数日前の結果と比べてもこれといった変化は見当たらないし、アマダムもいつも通りの活動をしている。あとはしっかり用心をすることと……」

「未確認が、これ以上強くならないことを祈るだけですよね」

椿の言葉を遮って、雄介が言う。

雄介の言葉が示しているとおり、未確認生命体の強さはより大きな

ものとなっていた。

毒の胞子によって雄介を一度仮死状態にまで追い込ませた者もいれば、戦える時間が大幅にカットされる緑色のクウガでなければ姿を捉えることが出来なかった者、さらには古代からのクウガの相棒ーゴウラムが合体したトライチェイサーの突進攻撃に耐えることが出来る者。さらにはそれらの力を遥かに上回る、複雑なゲームを開始した未確認生命体までもが現れ始め、未確認生命体による被害もより大きくなっていた。

そんな最中、未確認に対抗するように現れた金の力。この力はクウガにより大きな力を与え、強力な未確認生命体とも互角以上に渡り合う力を与え、雄介や一条や椿、人間を勝利に導いてきた。しかし、金の力を利用することで、未確認を倒した際の爆発の被害や、雄介の体への影響が遥かに大きくなったため、多用できる代物ではないことも事実である。

金の力が現れ始めた原因は、雄介が仮死状態に陥った際に椿が雄介に施した電気ショックとされている。電気ショックが雄介の体を通ってアマダムを刺激することに加え、雄介の「強くならないといけない」という思いが脳からアマダムに送り込まれたために、アマダムに変化が現れた、というのが雄介、椿、一条の見解だが、実際のところは不明だ。

この金の力に対して、とくに爆発の被害が圧倒的に大きくなった点に、雄介はあまり良い印象をもっていなかった。それ故に雄介はこれ以上強い敵が出てこないように、『強くならないといけない』と思ってこれ以上強い力を手に入れないようにと心のどこかで感じていたのだ。

「まぁ、いなくなるのが一番なんですけど、まだ倒さなきゃいけない奴らもいますし…。それまでは精一杯頑張ります！」

雄介は苦笑いを浮かべながら、言葉を繋げた。椿はそんな雄介を見ながら、「そうだな」と返した。

「とにかく、未確認生命体が出ていない以上、お前はしっかり体を休めろ。いくらお前自身が大丈夫と思っても、見えない疲労は蓄積しているだろうからな」

「はい！じゃ、俺はこれで失礼します」

言うと同時に、診察室を立ち去る雄介。それを笑顔で見送る椿だったが、雄介の姿が見えなくなると神妙な顔をして雄介のレントゲン写真を再び見直していた。

ＡＭ１０：４６　群馬県山間部

「こいつは…ひどいな…」

現場に到着した杉田が、まるで汚物を見るかのような表情でつぶやいた。言葉を発していないが、未確認生命体対策班からこの現場に駆り出された一条や桜田も同じような表情をしていた。

視線を右に向ければ、生い茂った木々に、何かが切り裂いたような鋭い爪痕が残されており。

正面に向ければ、何か鋭く尖ったようなもので幾度も突き上げられ、限りなく崩壊させられた、誰かが乗っていたであろう車が。

左に向ければ、何かが爆発したかのようにめくれあがり、焦げた土が見えていた。

いずれの光景にも、生物の体を流れる血液や、生物の肉片が散乱した状態で。

現場の凄惨さを目のあたりにしていた3人を見て、この現場を担当していた刑事が3人のもとに駆け寄ってきた。

「遠路はるばるのご協力、感謝いたします」

「お疲れさん」

「状況は、どうですか？」

現場の担当刑事の挨拶に杉田が応え、一条が捜査状況について質問する。

「今回の騒動での被害者は群馬県在住の大学生3名。うち1名が男性で、他2名が女性です。不幸にも全員、命を落としていました」

その知らせに一条、杉田、桜井の3人は表情を暗くした。

「この3人の死亡推定時刻はいずれも昨夜7時30から9時までの間。死因はバラバラで、男性の体には何か鋭いものに複数回切り裂かれた後に、首もとを鋭い歯のようなもので噛みつかれて死亡。女性のうちの1人は崩壊した車についていた傷と同等のもので体を貫かれたことにより死亡。もう1人の女性は何らかの爆発物による爆発によって死亡したと解剖の結果、確認されました。死体に残った傷跡を調査した結果、人間による被害ではないものと、当署内では判断いたしました」

被害者の被害状況についてまとめられた資料を3人に配布しつつ、担当刑事は3人に説明した。

資料に目を通す3人は、それに掲載されていた被害者の被害状況が写された写真を凝視した。

「解剖した担当医と鑑識班からの情報を統合した結果、複数の未確認生命体が出現した可能性が高いと、当署内では判断しました」

被害者の被害状況から見ていた一条らは、その判断に納得した。これほどにまで殺害方法が異なっているのだから、別々の未確認生命体による被害とみて捜査を行うべきだろう。

しかし、その一方で一条は疑問を抱いていた。

これまでの未確認生命体はある一体が活動している間は、他の未確認生命体は派手な活動をしていなかった。故に、未確認生命体対策班は一体への対策を考案し、その度にその未確認生命体を倒すことに成功してきたのだ。逆を言えば、これまでに未確認生命体を倒せてきたのは、彼らが一体のみづつで活動してきたためになんとか対抗できていたと言っても過言ではないのである。

未確認生命体同士が協力をし、人間を殺害している可能性も考えられるが、彼らの行動は、『制限時間内にどれほど人間を殺害できるかを競うゲーム』と言うことが明らかとされている。この自己中心的なゲームの仕組みが、ゲームを考案した未確認生命体自身の性格を含んでいるとすれば、このゲームの娯楽を他の未確認生命体に分け与えるということは考えられない。

これらの点から、未確認生命体が同時に行動する可能性は今まで考慮する必要がないと上層部は判断してきたのだ。

その中で、複数の未確認生命体が同時に活動をしている可能性が出てきた。

このことが意味するのは、この段階に来て未確認生命体が何かを始めた可能性と、対策班の動きを大きく変える必要性があることを意味していた。この一条の考えは、他の２人にもすぐに伝わった。

「この３人以外の被害は？」

「現在、確認されておりません。しかし、３人と共に車に乗っていた男性１人が行方不明で、現在行方を追っております」

それを聞くやいなや、それぞれが別の行動に移った。杉田は警視庁とこの地域との合同捜査を行うための指示を捜査本部に指示、桜井は行方不明者の探索の補助とともに未確認生命体に関した更なる情報の収集、一条は関東医大病院の椿に持っていくための被害者の遺体状況をまとめたものの提供をこの地域の警察に依頼するという運びとなった。

ＡＭ１１：３７　海岸線　汐留自然公園

すぐ側にある海の潮の香りが鼻をくすぐる。風が吹きやすい地形であるために、公園内で時を過ごす人々は非常に穏やかな表情でそれぞれの時を過ごしていた。

しかし、公園内の芝生に寝転がる青年一五代　雄介だけは何かに悩んでいるような表情をしていた。

「はぁ……」

目の前に広がる青空に向かって、溜め息を吐き出す雄介。息をはききると同時に、雄介は静かに目を閉じた。

雄介の瞳の裏には、第４２号と闘った時の光景が浮かんでいた。場面は、金の力を纏わせた紫色の姿ーライジングタイタンフォームで４２号にとどめを刺そうとした瞬間。あの時、雄介は憎しみの心のみで自身を動かし、そして憎しみのまま、４２号を傷つけ、その命を奪った。

その際に脳裏に浮かんだ戦士のシルエット。

全身の至るところが禍々しく、鋭くとがっており、近づくだけで傷つきそうな体は本当の闇のように黒くそまっており、その戦士の角は２本ではなく４本。さらにその戦士の心に秘めた優しさを感じさせる大きな２つの複眼も、まるで優しさが枯れ果ててしまったかのように黒く染まっていた。

その禍々しき姿の戦士を、クウガと判断するのは雄介にとって造作もなかった。その戦士の凄まじさ、恐ろしさも手に取るように分かり、同時にその戦士が雄介の友人ー沢渡（さわたり）　桜子（さくらこ）が以前から話していた『凄まじき戦士』であることも理解していた。

「結局、椿さんには言えなかったな……」

雄介はそのシルエットが脳裏に浮かんだことを、椿には言っていなかった。

これまで雄介が新しい力を手に入れることによってアマダムには何かしらの変化があり、椿による診察でも変化があることが確認されてきた。例のシルエットが浮かんだことによって、また何かしらの変化が表れるのではないかと雄介は警戒していたのだが、どうやら椿の目から見てもアマダムの変化は確認されなかったようである。

しかし、脳裏に浮かんだ禍々しき戦士を見て、雄介は椿にもこのことを告げるべきだと判断していたのだ。

理由はいくつかある。

現段階において、自分が未確認生命体を討伐するための最重要戦力であることがひとつ。

自身のコンディションを最善の状態に保つために、自身の状態を常に把握しておき、また自身の専門医となっている椿にも把握しておく必要があることがひとつ。

そして、何よりの理由が……

その戦士に対して、少なからず恐れを抱いたためである。

これまで雄介は、他人には出来る限り見せなかったがクウガに変身することに対して恐怖を感じていた。椿が何度も警告する、未確認生命体のような生物兵器になることに、だ。

雄介は争うことを嫌っていた古代民族ーリントが作ったこのアークルは未確認生命体ーグロンギに対抗するための代物であることを重々理解していたため、グロンギと同じ存在になるような代物を作ることはあり得ないと考えていた。しかし、凄まじき戦士のシルエッ

トは、これまでの雄介の考えを一変させるのには十分だった。

そして雄介は再び警戒し始め、凄まじき戦士のシルエットを見ることでグロンギ同様の体になってしまうのではないかとも考えていた。

その恐怖と緊張感のなかで、椿から『問題ない』と言われた。その言葉は雄介に安心感を与え、張り詰めていた緊張の糸を断ち切らせたのだ。

「やっぱり、あそこで安心したのはまずかったかなぁ……」

そう言いながら、自分の腹部を見る。付き合いが長くなってきたとはいえ、まだまだアマダムについては謎が多い。古代の碑文にも、重要なことはあまり書かれていなかったようなので、手探りの要領で調査をしていくしかないようだ。その手探りを行える大半がリントと雄介が嫌いな戦闘というのは皮肉な話であるが。

「まぁ、次の検診の際に言えばいいか」

重要な話であるのだが、持ち前の気楽さで先程まで考えていたことを脳の隅に押し込む雄介。雄介はそのまま起き上がり、ポレポレの手伝いにいくため、近くに止めていたビートチェイサーに向かう。するとビートチェイサーから未確認生命体対策班からの連絡の際になる音が鳴った。

『五代雄介。聞こえるか？』

ビートチェイサーに搭載された無線機から、一条の声が聞こえた。

「はい！」

『群馬県にて新たな未確認生命体による犯行と思われる事件が発生した』

「43号、ということですか？」

『いや、まだその可能性の段階だ。それに、現場には奇妙な点がいくつかあるんだ』

「奇妙な点…？」

それから数分間、無線機のスピーカー越しの会話が行われ、雄介はその話に真剣に耳を傾けていた。

『……以上の点から含めて、複数の未確認生命体が同時に行動を開始した可能性が考えられる。幸いにも被害はこの事件のみで留まっているが、未確認生命体が東京や人の多い地域に移動しないとも限らない』

「じゃあ俺はこっちで待機しておきます。何かあったら連絡して下さい」

雄介の言葉に『ああ』という一条の返事がスピーカーから聞こえ、通信が途切れる。

久しぶりの休みの日に舞い込んだのは、未確認生命体の新たな動き。数瞬前まで穏やかだった表情を引き締め、雄介はビートチェイサーのエンジンをかけ、自然公園を後にした。

時刻　場所不明

自分は目覚めてしまった。

それは自分を封じていたものもまた、目覚めてしまったからというのを自身のうちの何かがそっと囁いた。

この世界に、目覚めてしまった自分は、それを再び封じにいかなければいけない。

再び自分をこの世界からいなかったことにするために。

自分を封じたものを、唯一大切と思えたそれを守るために。

「ラデデギソ…クウガ」

それは、倒すべき存在の名前を、静かに口にした。

EPISODE3　驚愕

ＰＭ１：４６　東京都葛飾区

駅前の大きな交差点を多くの車が行き交う。その交差点の歩道には信号機に足留めをくらう大きな人混みがあった。

やがて信号が足留めの対象を変えると、人混みは一斉に車道に溢れ出す。その中で立ち止まることができない程の流れは、歩道から出てくる人が絶えないことにより長く続いていく。

その中で、一人の女性が立ち止まっていた。

１０代後半から２０代前半に見える容姿は、同世代からは好評を得るであろう。背中まで届く髪は少しウェーブがかかっており、裾が膝上まである白に近い青色のワンピースに、彼女の体にフィットした黒い上着を羽織っている。

彼女の周りを歩く人々は彼女を避け、人混みに消えていくため、彼女に文句を言う者は誰もいなかった。

「……」

少女は無言で、無表情だった。しかし、彼女の脳は悲鳴をあげ、既に限界に到達しようとしていた。その表情からは読み取れないほどの痛みに、だ。

「……」

あれは何？

ここは何処？

みんなは何処？

変わり果てた光景を目の前にして、少女は混乱していた。

「……」

少女はこれ以上脳に情報を送り込まないように、両目を閉じる。

自身が育ってきた家、大切な家族、友人。そして、想い人。

瞳を閉じれば蘇る、昨日ー否、はるか昔の光景。大切な人々と作った掛け替えのない思い出が、何よりも愛おしかった。

ずっと瞳を閉じていたい……そのように感じるほどに。

「リク……」

想い人の名前を呟く。

宛てのない少女は表情を変えることなく、ふらふらと歩き出した。

どこにいるか判らない想い人を求めて。

ＰＭ１４：３７　文京区内　ポレポレ

「ありがとう、またよろしくね」

店内にいた最後の客が会計を済ませ出て行く。客の流れがピークとなる時間が過ぎた店内には店独特の静けさが戻った。

「……おい、奈々。いい加減、店を手伝え」

玉三郎は、会計の際に受け取った千円札をレジにしまうと、窓際のテーブルに一店の手伝いもせず、客の流れがピークの際にも堂々とうなだれていた奈々に話しかけた。

「五代さん、なんでこんなに遅いんやろ……」

ため息を吐き、憂鬱な表情を浮かべる奈々。そこだけを見れば、ヒロインが想い人を待ち焦がれるドラマの悲しげなワンシーンだが、仕事もせず、大切な客達の穏やかな一時を大きなため息で台無しにした元凶に対して、玉三郎は呆れ果てて言葉はおろか、なんの感情も浮かばない。

玉三郎は奈々の向かいに座り、奈々と同様にテーブルにうなだれた。

「……はぁ」

「……なんでおっちゃんも溜め息つくん」

「いやぁ……雲が流れていくのを見ると、遠くにいるあの人のことを思い出すなぁって……」

「似合わへん」

前言撤回。怒りがふつふつとこみ上げてきた。

頬をひきつらせながらも、少しずつ体を起こす玉三郎のもとに……

『ジリリリン』

否、ポレポレに電話が入ってきた。玉三郎は、怒りの表情を奈々へ向けながらも電話の下に向かう。

「はい、オリエンタルな味と香りの……おや、桜子ちゃんかい？」

『あの、そちらに五代くんいますか？』

電話の主、桜子に対して営業用の口調を止める玉三郎。

「雄介？なんか関東医大病院に行くって言って、まだ戻ってないけど」

同時刻　長野県警内

「そうですか……いつ頃戻るか聞いていませんか？」

『い～や、なんも聞いてないよ。あいつ、基本何時に戻るか言わない質だからね』

それを聞き、桜子は少々表情を曇らせる。

長野県の九郎ヶ岳遺跡の近くで発生した大量惨殺事件。桜子はその調査の助っ人を長野県にいる一条の後輩刑事ー亀山（かめやま）から依頼されていた。

依頼内容は事件現場に残された、惨殺された未確認生命体の体内か

ら流れ出たとされる血液で書かれた巨大な文字の情報提供だ。その文字の形が九郎ヶ岳遺跡から出土された古代の碑文や数々の物体に記述されていたものと酷似していたため、文字の調査をしていた桜子に話が舞い込んだのだ。

桜子の解析が正しければ、その文字が示すものは、五代雄介が変身するクウガを指し示す『戦士』。文字の形状からしても間違いないはずだが、なぜその文字が残されていたのかという理由が判らない。

それに加え、桜子はこの文字を見た瞬間から疑問を抱いていた。雄介の腹部にあるアークルやそれに組み込まれたアマダムと同じ時代に生きていた、平和を愛した民族ーリントが戦いの意味を含めた言葉『戦士』の文字を作ることが、桜子はどうしても判らなかったのだ。

そのような中で最近になって九郎ヶ岳遺跡内部の再現に成功したとの連絡を受けた。

これまでの解析はデジタルカメラの撮影画像を基に行わなければいけなかったため、どうしても細かい箇所までの解析は行えなかった。

故に桜子は長野県にしばらく残り、出土品に記されている文字を直接視て隠されている古代の真実を確認した上で、文字が残された理由について調査することにしたのだ。

そのことを桜子は雄介に簡潔に伝えようとした。あの文字がどういう意味を示しているのかは不明だが、未確認生命体の中で何か動き始めていること、雄介に対しても良からぬことが起こる前触れであることは無意識のうちに理解できたからだ。

『雄介に用事なら、伝えとこうか？』

伝言するかどうかを訊ねる玉三郎。しかし、このようなことを玉三郎に伝えても玉三郎は理解できないと思うので、桜子は伝言を控えようと考える。

「あ、いえ。大した用事ではないので……五代くんが帰ってくる頃にまたかけ直します」

『ただいま帰ってきました！！』

耳元で聴こえた大きな声に、耳から受話器を離す。

「……五代くん？」

『そう、俺です！！』

「ごめんね、すぐに出られなくて」

『ううん、気にしないで。それより体大丈夫だったの？』

「うん、バッチリ！椿先生のお墨付き」

『そっか、それならいいんだけど』

受話器越しに桜子の安堵感が伝わってくる。なんだかんだで彼女を心配させてしまっていることに雄介は申し訳なく思ってしまう。

『それで、用事って？』

雄介が話を切り出したことで、桜子はそれを伝えることを思い出す。

『五代さん、無事やったんですね！！信じてました！！』『おい、電話中は静かに……』と受話器越しに聴こえる会話が微妙に気になったが。

「今、未確認関連のことで長野県にいるんだけど、ちょっと長引きそうなの。大学の研究室には入れないってことを伝えておこうと思って」

『そっか。それで、何か分かった？』

「遺跡の再現が完了したらしいからそっちに行って原文を直接見るつもり。ひょっとしたら、今までの解析で判らなかったことのヒントが見つかるかも」

「分かった。気をつけてね」

『うん。あ、そうだ』

桜子の声に、雄介の頭の中に疑問符が浮かぶ。

「ん？」

『もしも碑文の解析結果が見たかったらジャンに連絡してみて。詳しい意味までは載せてないけど、きっと何かの役に立つと思うから』

「うん、分かった。じゃあ、頑張ってね」

『うん、じゃあね』

その言葉を最後に電話が切れる。雄介も受話器を元の場所に置くと玉三郎が抑えていた奈々が身を乗り出してきた。

「五代さん！！」

「ん？」

「何か悪い病気にかかってて、病院に行ってて、状態悪くなって倒れてたんですか！？」

意味不明な言葉に、雄介の頭の中に疑問符の大量の疑問符が浮かぶ。翻訳を求めるように玉三郎の方を向くが、目が合った瞬間に『話をふらないでくれ』と言っているかのように、物凄い勢いで明後日の方向を向いた。

「……え？」

行く宛を失った言葉がポレポレの店内を彷徨っていた。

ＰＭ１５：４３　群馬県山間部

椿に事件の被害者の解剖データを見るように依頼した後、一条は行方不明者である青年の捜索に加わっていた。未確認生命体との戦闘を考慮し、彼の右手には幾度となく雄介の窮地を救ってきた高性能ライフルが握られている。

「一条さん！」

別の隊と共に捜索していた桜井が一条と合流する。

「どうしました？」

「この付近は夜になるとほとんど周りが見えなくなり、危険なようです。少々早いですが、本日の捜索はこれで終了との指示がありました」

「そうですか、分かりました」

現在捜索している範囲は太陽の光がある現在でさえ視界の状況が悪い場所だ。太陽が完全に沈めば逆にこちらが遭難してしまうだろう。

「それにしても」

事件現場に駐車したパトカーに戻る最中、桜井が一条に話しかけた。

「今回の未確認はいつも以上にややこしい動きをしてますよね？」

その点は一条も同じ感想を抱いていた。

これまで未確認生命体はその場にいる人間を基本全滅させてきた。特別なルールを設けられたゲームで、その青年が条件にあてはまらなかった、との見方もあるが未確認と関わった者が行方不明となった報告はなかった。

また、被害者を殺害した場所に関してもそうだ。こんな人気がない場所よりも、人が多い都心部にて条件に合った人間を探す方が効率

が良いはずだ。

挙げ句の果てには、複数の未確認が活動している可能性もある。いずれの現象も過去の彼らの行動には全くあてはまらないのである。

もしくは今まで警察が捉えていた活動は彼らがわざとそうしていたもので、実際の目的はもっと別のところにある可能性もあり得る。

思いつく可能性が、また別の可能性を呼ぶ未確認生命体の行動。考えれば考えるほど、泥沼にはまっていく感覚を一条は覚えていた。

「……？」

その時、胸ポケットに入れていた携帯が振動した。ディスプレイには、『椿　秀一』という名前が表示されていた。

「椿か？」

『一条、たった今、被害者の写真と死因のデータが見終わった……とんでもない可能性が出てきたぞ』

緊張感の張り詰めた声が、一条の耳を刺激する。その緊張感がすぐに一条にも伝わり、自然に一条の表情も険しいそれへと変わった。

「一体、何が分かった？」

『直接見た訳ではないから、確実な証明は出来ないんだが……』

前置きと思われる言葉を並べる椿。そして彼は自身が出した可能性についてを一条に語り始めた。

「なんだと…！」

それを聞き終えた一条は、驚いていた。その一言に一瞬携帯電話を落としそうになるが、なんとか意識を取り戻す。その様子から電話の会話を把握していない桜井にも緊張の表情が浮かぶ。

『だから、俺は時間を見つけて被害者の体を直接見に行く予定だ。そこで何か分かったら連絡する』

「あぁ、分かった……頼む」

『一条、くれぐれも気をつけてくれ。何かとんでもないことが起きているかもしれない』

「あぁ……また何か分かったら連絡を頼む」

『分かった』

その一言を最後に椿との連絡が途切れる。電話が終わった後も一条は先程の電話の内容が信じられないといった様子だった。

「一条さん、さっきの電話は……」

桜井が問いかけようとした時、再び一条の携帯が着信を告げた。

「はい」

『一条、杉田だ。そこに桜井もいるか？』

いつも落ち着いている彼の声は、ひどく驚いたようだった。

「はい、どうかしましたか？」

『大至急、戻ってこい。詳しくはそこで話す』

通話はそこで途切れた。椿からの連絡で告げられた仮説が関係しているかもしれないという焦りが自身の中からせり上がってくるのを一条は感じた。

こみ上げてくる焦りに支配されそうな思考の中で。

予想が外れて欲しいという僅かな願いを抱きながら。

一条は衝動のままに、走り出していた。

ＰＭ１５：２７　城南大学

「……さすがに、閉まってるよなぁ」

桜子からの連絡の後、雄介は考古学研究室に訪れようとしていた。しかし、桜子は勿論のこと同じ研究室に出入りしている外国人ージャン・ミッシェル・ソレルも在室中でなかったため、研究室に入ることは出来なかった。

そして、現在に至るわけなのだが……

「登ってみるか……？」

彼は得意のビルクライミングを実行するべきか悩んでいた。壁を登った後窓から入り桜子を驚かせるのが彼らの再開時の挨拶となっている（一度も驚かせたことはない）のだが、それは部屋の主がいる時にのみ行えること。主がいなければ窓の鍵は閉まっているのが普通なのだ。

それを分かっていながらも、彼は建物の3階にある研究室の窓を地上から見上げている。行き交う人々が雄介を怪しそうに見ながら通り過ぎていく中で……。

「窓の鍵なら閉まってますヨ、五代さん」

研究室の使用者の一人、かつ雄介の理解者の一人であるジャン・ミッシェル・ソレルが声をかけてきた。

「ジャン、ちょうどいいところに！！」

「桜子さんから、五代さんに検索のやり方とか基本的な解析結果の見方を教えて欲しいって言われテ」

「そっか。助かるなぁ」

「でも僕もゴウラムの資料纏めるのとか科警研の手伝いとかで忙しくて、五代さんが来たい日に来れないかモ」

どうやらジャンは研究室の戸締まりについてを述べているらしい。確かに、ジャンも多忙であるから雄介が見たいと思ってもそれを実行できるのは難しいだろう。

それに古代の碑文は今や、未確認生命体の文化や習性を見抜くことに重要な役割を果たしている。そのようなものを開けっ放しの部屋に放置することなどあってはならない行為なのだ。

「なので五代さんに、合い鍵渡しときまス。これでいつでも入れますヨ」

「ホント？サンキュー、ジャン」

サラッと軽く言うジャンに、雄介も軽く合い鍵を受け取る。もはや二人の中には碑文のデータに対する責任感は皆無に等しいのかもしれない。雄介には少なくともその意識があるかもしれないが、ジャンに至ってはあるのかないのか判らないのが、怖い。

「でも、戸締まりはしっかりしてくださいヨ。僕、桜子さんに怒られちゃうカラ」

「分かってるよ、ちゃんとすれば問題ないんだよね」

雄介が言い終わって、二人で研究室の棟に入ろうとしたとき……。

『校内の皆さん、緊急連絡です！この付近に未確認生命体が出現しました！校内の皆さんは速やかに付近の建物に避難して下さい！繰り返します！この付近に……』

「未確認……！？」

その言葉を聞いた雄介の表情は、笑顔の似合う穏やかなそれから険しいそれへと一変していた。付近にいる人も「未確認だって……」

「怖いね……」と曇った表情でつぶやきながら、避難していく。

「おぉ、未確認……。この付近にも出るなんテ……」

先程まで明るい表情だったジャンまでもが、その表情を暗いものと変わる。

名前が出ただけで、聞いた者の笑顔を奪っていく未確認生命体。

理不尽な形で笑顔を奪い去るそれを、雄介は見逃せるはずがなかった。

「ジャン、ごめん！！」

「五代サン！？Ｗｈａｔ' ｓ　ｈａｐｐｅｎ！？」

突然ジャンのもとから走り出す雄介。その行動に驚いたジャンは雄介に問いかけるが、雄介には聞こえない。

速やかにビートチェイサーを駐車した場所へと走り込んだ雄介の耳には、ビートチェイサーに搭載された無線機の警音が飛び込んできた。

『こちら、池波０２、池波０２！！西葛飾区三番通りにて未確認生命体と交戦中！！すでに警官１２名が負傷しています！！すぐに応援を……！！』

ズキンと、雄介の胸に痛みを感じた。また、理不尽な形で命が奪われようとしている。胸の痛みを押し殺しながらも雄介は無線機から

聞こえてきた交戦現場に向かうため、ビートチェイサーを全速力で走らせていた。

ＰＭ１４：４９　　東京都西葛飾区三番通

人気がめっきり減った通りに、銃声がいくつも鳴り響く。

それの引き金を引くのは、通りのど真ん中に停められた十台近くのパトカーを操作している警官。

その銃の対象は、目の前にある未確認生命体と呼ばれる異形の怪物。

その怪物の足下には、怪物の手によって負わされた傷にもがき苦しんでいる人々。

そして、その怪物は警官の拳銃を喰らっても何食わぬ顔で警官達に近づき、まるでハエをはたくかのように警官達をたたきのめす。通常の人間をはるかに上回る腕力によって、警官の腕や顔面の骨を簡単に崩壊させながら、また次の警官へと手を伸ばす。

その行為が幾度となく繰り返され、遂に健全な警官が一人となってしまった。未確認生命体の背後にいる倒れた味方を見て、自分に起こり得る未来が脳を支配し、体が全く動かなくなる。ただただ恐怖の表情を浮かべるしかない警官のもとに未確認は一歩ずつ近づいていく。

そして、未確認の手が警官に触れる瞬間……。

真横から、一台のバイクが猛スピードで未確認に突進してきた。そのバイクの出現を予想していなかった未確認はまともに防ぐことが出来ずに吹き飛ばされ、近くの空き家に激突する。その衝撃で空き家は崩れ去り、未確認はその下敷きとなってしまう。

雄介は今がチャンスとばかりに腰を抜かした警官を救助する。

「大丈夫ですか！？早く逃げて下さい！！」

予想していなかった救援に驚きつつも、警官はその場を速やかに後にする。

それを見届けた雄介は再び空き家を見る。そこでは未確認が瓦礫の下から脱け出そうとしていた。

すかさず雄介は両手を自身の腹部にかざす。「力が欲しい、戦いたい」という思いを込めながら、腹部に意識を集中させる。

すると雄介の腹部に銀色をした現代では見られない、現代の言葉で表すとベルトに似た物体が浮かび上がる。

アークル。

未確認生命体を倒すために古代の民族が作り出したものである。

雄介は軽く握った左手をアークルの右端に触れるように、開かれた右手を薬指と小指を少し曲げた状態で左前方に突き出す。
そして、左手をアークルの左端のスイッチのような部分に。
右手は空を切るように右前方へと移動させる。

そして、雄介は叫ぶ。

「変身！！」

前方に突き出していた右手を左手にかぶせるように移動させ、重なった状態でスイッチのような部分を押し込む。

アークルの中央に設置された石ーアマダムが赤色に力強く輝き出し、重々しい音が徐々に明るいものへと変わっていく。

そして、今再び重々しい音が鳴り響いた瞬間、雄介の姿は人間の姿ではなくなっていた。

天に向かって突き出した金色の二本角。

昆虫のような、大きく真っ赤な複眼。

筋肉の構造を彷彿とさせる、真っ赤な鎧。

そして、両の手首足首に取り付けられた金の装飾品に埋め込まれた

赤い宝石。

そこにいたのは、古代において未確認生命体を倒してきた戦士クウガの姿だった。

雄介の変身が終わった瞬間、瓦礫が吹き飛び、下敷きになっていた未確認が再び地上に姿を現した。

しかし、その姿をみた瞬間……

「……っ！！そんな……！？」

雄介の中に大きな動揺が生まれた。

同時刻　群馬県山間部　事件発生場所付近

杉田からの報告を受けてから一条は走り続けていた。後ろを走る桜井にも目もくれずに、ただただ走り続けていた。

「杉田さん！！」

事件現場付近に建設された捜索本部に戻った一条は普段から考えられないほどの大声を出し、杉田を呼ぶ。

「来たか……」

そう言う杉田の表情は緊張のあまり張り詰めており、また疲れきっているようであった。そんな表情を見たことのない一条は何が起こったのだろうという思いを抱く。

「東京都西葛飾区付近の防犯カメラの映像が、とんでもないものを捉えていた。見てみろ……」

そう言って杉田は自分が見ていたパソコンを一条に見るように促す。それに従い、一条もパソコンの画面を見る。

そして、一条は言葉を失った。

「杉田さん、これって……」

後からやってきた桜井も、画像を見て驚愕していた。

「こいつは、紛れもなく本当のことだ……」

杉田も、画像の内容が信じられない様子で語っていた。発する言葉のあちこちに疲れが浮かんだ様子で。

呆然とする一条の脳内に、椿から受けた連絡がフラッシュバックする。

『過去の未確認生命体の被害者に残された傷と、今回の被害者のそれが完全に一致していた』

それを聞いた一条の脳裏に浮かんだ一つの仮説。

その仮説が正しいことを、目の前の画像が証明していた。

一条が見ている画像の中には。

そして、雄介の目の前には。

かつて倒したはずの未確認生命体第６号が立ちはだかっていた。

EPISODE4　邂逅

目の前の光景に、雄介は混乱していた。あまりの衝撃に心拍のリズムが上がり、不規則になった呼吸の音がいやにやかましく空間に広がっていく。

「どうして……！？」

体の全てが硬直した状態で唯一働く『考える』という機能をフルに使い、雄介は現状を把握しようとする。

なぜ、かつてこの手で倒した未確認生命体第６号がここにいるのか？

目の前のあり得ない事実は、雄介が持つ冷静さを完全に吹き飛ばしてしまっていたのだ。

未確認生命体第６号。飛蝗を擬人化したような姿をしており、その外見通り高い跳躍力を活かした戦法を得意としていた。当時、赤のクウガの力しか持っていなかった雄介を瀕死寸前まで追い込んだが、新しく手に入れた青いクウガの力を使ってようやく倒すことが出来た強敵である。

今、クウガの前に立ちはだかるその姿は以前のそれと全く変わっていなかった。強いていうのであれば、全ての未確認生命体が腹部に

付けている装飾品らしきものを、目の前の６号は付けていないという点ぐらいである。

「ヴ……ヴァァアアア……！！」

うねり声を上げ、第６号が動き出した。それに反応したクウガは思考を停止し、動くようになった体でファイティングポーズをとる。

ジリジリと近づく第６号に対し、クウガもジリジリと近づいていく。無闇に飛びかかれば、その跳躍力でたちまち回避されてしまうからである。

そして、お互いの距離がおよそ３ｍまで縮まったとき……。

「グァ！！」

第６号が右拳をクウガの顔面めがけて繰り出した。その動きに反応したクウガは左手でそれを払い、お返しとばかりに右拳を繰り出す。すると相手はクウガの右腕を抱え込む形でガッチリと拘束し、逃げられなくした相手の右脇腹に右膝を数回たたき込む。

「グゥ……！」

それに対し、クウガは自由に動く左腕を第６号の腹部に浴びせる。

「ガ……」

解放されたクウガは再び相手から距離をとる。が、第６号が大地を

蹴り、その距離は一瞬のうちに詰められ、第６号はその勢いのまま、クウガを蹴り上げた。

「ク……！」

後退際に後ろへの勢いがさらに加えられ、クウガは後ろに転がってしまう。隙を与えないように第６号は踏みつけようとするが、クウガは両腕を交差することで衝撃を吸収し、その状態から相手の背中に蹴りを入れる。

「オリャア！！」

第６号が怯んだ隙に体勢を立て直すクウガ。第６号と再び向かい合う形となるが、双方ともすぐに相手に向かって走り出す。

「ハァァ！！」

「ウォリャ！！」

そして、双方とも右拳を相手に突き出す。が、クウガは相手に拳が当たる寸前で勢いを止め、第６号からの一撃を上半身を少し左側に傾けることで回避する。

「！？」

そのクウガの行動に、第６号の動きが一瞬停止した。

「フッ！！」

その一瞬のうちに、クウガは左掌底を繰り出す。一撃をくらった第６号は後ろによろめくが、この隙をクウガが見逃すはずがなかった。

「オリャアア！！」

クウガは怯んだ第６号に渾身の右ストレートを放つ。直撃を受けた第６号は吹っ飛び、落下した先にあった一台のパトカーの屋根を陥没させた。

「今のうちに……！！」

これを好機と見たクウガは、変身する際に見せたポーズを再びとる。すると今まで赤く輝いていたアマダムの色が、水のような青色へと変化した。

「超変身！！」

水の波紋を彷彿とさせる音を発しながら、クウガの体が変化する。アマダム同様、赤色だった部分が青色へと変化し、胴体は筋肉を彷彿とさせたそれをよりシャープにしたものへと変化する。

クウガの戦闘形態のひとつ―ドラゴンフォーム。バランスを重視した赤いクウガ―マイティフォームの打撃力、防御力を減らし、機動力を向上させたそれは、かつて第６号を倒した姿である。

その姿に変化を終えた後、クウガは付近にあった細長い棒を手にする。すると、クウガの体が変化したように、その棒はクウガの体のように青く伸縮自在の棍棒へと姿を変化させた。

このドラゴンフォームは、通常形態のマイティフォームと比べ、打撃力が落ちてしまっている。これをカバーするため、パワーを犠牲にして高めた機動力と、攻撃範囲と命中性に富んだ武器―ドラゴンロッドで相手への攻撃回数を増やしているのだ。まさに攻撃の質を

量へと変えた姿である。

ドラゴンロッドを持ったクウガは、よろよろと立ち上がる第６号のもとへと向上した跳躍で向かう。それに反応した第６号は右拳を突き出すが、クウガはドラゴンロッドの横でそれを受け止め、押し返す。

足下がおぼつかない様子で退く第６号。クウガと第６号の距離が、ドラゴンロッドの最良の攻撃範囲に達した瞬間、クウガはドラゴンロッドを振るう。

「ハァ！！」

遠心力によってドラゴンロッドの一端が伸び、威力が増したその一撃は第６号に直撃する。二撃、三撃とロッドを振るう度に第６号の体にダメージが蓄積していく。

とどめだと言わんばかりに、ロッドの一端で第６号を突き放す。クウガは大きく跳躍し、隙だらけの第６号にロッドの一端を突き立てようとした。

「うおりゃあぁぁ！！」

その一瞬、もうひとつの影がクウガ以上の高さまで跳躍した後に、空中で片足を曲げ片足を突き出し―クウガマイティフォームの必殺技、マイティキックに酷似した体勢をとる。

「！！」

その影に気づいた瞬間、クウガはその影のキックをくらっていた。

突然の奇襲にクウガは受け身をとれずに地面に落下した。

「ぐぁ……！！」

通常の人間よりもはるかに強力な肉体とはいえ、防御力が低いドラゴンフォームでは落下の衝撃を多く受けてしまったようだ。クウガはなんとか痛みをこらえ、その場に立ち上がる。

「……っ！！」

目の前をみた瞬間、雄介の思考が再び麻痺する。

そこにいたのは、第６号の肌をより黒に近づけた第６号に酷似した未確認生命体。

未確認生命体第４１号の姿だった。

「４１号まで……どうなってるんだ！？」

次々と現れる、倒したはずの未確認生命体。

衝撃に次ぐ衝撃により、混乱の渦に飲み込まれるクウガ。その上、二対一という不利な戦況になっているため、クウガにとってこれまでにない危機的状況になってしまっていた。

しかし、またしてもその状況は一変する。第４１号が第６号に向かい、顎で何か合図をしたかと思った後、二体は彼方へと逃亡していた。

「……待て！」

やっと体に力が入るようになったクウガが慌ててその後を追う。しかし、そのタイミングが遅れたのか二体が逃げた方向には、それらの姿は見つからなかった。

「何が、どうなってんだ……」

変身をといた雄介が、呟く。その雄介の心中は未だ、膨大な混乱の嵐が渦巻いていた。

ＰＭ０３：０７　群馬県山間部　事件現場付近

「倒したはずの第６号と第４１号が現れただと！？」

『はい……ただ、逃げられてしまいましたけど……』

送信されてきた防犯カメラの写真を見た直後の雄介からの連絡によって、一条は先程の経緯を聞いていた。それを聞いた一条は、自身の考えた仮説が当たっていたことに対して大きな喪失感を抱いていた。

これまでしてきた努力が全て無駄に、無くなってしまった。

そんな、喪失感を。

『すいません……』

無線機の向こうから、雄介の謝罪の言葉が聞こえた。
『次こそ、絶対に倒します』
こちら側の意気が消沈してしまったことを感じたからか、向こう側の声も少し沈んでいた。
「気にするな。それよりも、第６号と第４１号に関してなんだが、何か不審な点は見当たらなかったか？」
話題をすり替える一条。責任感の強い雄介には下手な励ましは効果がない。口下手な自分が雄介の思考を切り替えるためには、これが一番有効な方法なのだ。
『とくに無かったと思うんですけど、強いて言えば腹にあった装飾品みたいなものがありませんでした』
「腹部の装飾品か……」
『たぶん、それがあいつらが再び出てきたヒントになると思うんですけど』
「いずれにせよ、それは重要な手掛かりだ。今回の事件も含めて、未確認生命体の活動を知るきっかけになるだろう」
未確認生命体。クウガと同じ時代を生きていた、殺戮を快楽としている集団。桜子の解析により、彼らの民族の名称はグロンギということが明らかになっているが、それ以外のことは全て謎に包まれている。
彼らが殺戮ゲームをする際に使用すると見られる遺留品は、使用目

的が依然不明なものばかりである。が、最近では身につけている装飾品から武器を生成する光景も戦闘中に目撃されているため、彼らの身に付けていた装飾品にも目を向けるべきだという声もある。

そして目撃された、腹部に装飾品のない第６号と第４１号。これらの点から見ても、彼らの装飾品を視野に入れての捜査が進むことはほぼ確定であろう。

『あと、もうひとつ気になることがあるんですけど……』

「気になること？」

雄介の発言に、より注意を向ける一条。

『さっき第６号と戦っていた時なんですけど、あいつジャンプを使った戦い方を全くしなかったんです』

雄介の発言に、一条は眉をひそめる。

第６号といえば、高層ビルなどの屋上などから人を落下させて殺害したり、その跳躍力でクウガを苦しめるなど、その跳躍こそが最大の武器のはずだ。

それを、現れた第６号は全く使っていないという。

『だから、赤のクウガのままでも十分に戦えたっていうか……とにかく、なんだか違う気がして……』

一条は考える。

第６号同様の姿を持ちながら、第６号の能力を使わないということ

を、雄介からの発言を聞くまで一条は想像していなかった。そもそも殺戮ゲームを快楽ととらえる未確認生命体が、快楽の中で自身の能力を使わない必要性はどこにもないため、そのような行動をとること自体が有り得ない、と一条は考えている。

しかし、他人の感情に敏感である雄介の並外れた洞察力が間違っているとも考えにくい。そもそも、雄介が嘘をつくことが考えられない。

これらの状況から、一条はひとつの結論を出した。

「結論を急ぐな。まだ手掛かりが少なすぎる。」

少なすぎる以上、調査を進めていくしかない。具体的なことを考えるのは、材料が十分に出揃ってからでないといけない。

一条は、そう結論を下した。

『そうですね。すいません、変なこと言ってしまって』

「それはいいが、君はこれからどうするつもりだ？」

『いったん城南大学に戻ろうと思ってます。ジャンに碑文の解析結果の見方を色々教えてもらおうと思って』

「碑文？」

新しい話題をふった一条だったが、雄介からの返答にさらに聞き返す。

「何か気になることでもあるのか？」

『第６号と第４１号が現れた理由について何か出てくるかもしれませんから。それに桜子さんも今いませんし』

言われて一条は思い出す。彼女は長野県警の後輩、亀山からの依頼で未確認生命体大量惨殺事件の手助けに向かっていたところだった。

雄介の言う通り、第６号と第４１号が再び現れた理由のヒントについても碑文に記されている可能性が十分に考えられる。桜子がいない今、解析結果の細かい解釈を聞くことが不可能なのは非常に痛いが、それを閲覧することが出来るだけでも、今回の事件のヒントを手に入れることが出来るかもしれない。

それに、雄介には並外れた『野生の勘』というものを持っていることや、その正確性を一条はよく知っている。碑文の解析結果から、彼が何かを得ることが出来れば、一石二鳥である。

一条は、その可能性に賭けてみることにした。

「よし、俺もこちら側の状況がある程度まとまってからそちらに合流する。君は解析結果の見方を先に聞いていてくれ」

『分かりました！』

この発言を最後に、雄介との通信が切られる。

第６号であり、第６号でないもの。

未確認生命体の姿をしていて、未確認生命体の力を使わないもの。
それは一体、何を示しているのか。
そして、何が起こっているのだろうか。
考えることを後回しにして、一条はパトカーに乗り込み、思い切りキーを回した。

ＰＭ０５：４３　板橋区内

夕焼けが街を赤く染めていく時間帯。その時間帯は、学校や勤め先から帰る人達で朝の通勤時の次に人混みが出来やすい時間帯。
大勢の人が自分の家を目指して帰路を急ぐ中、流れを邪魔しないような場所に数人の人影が現れる。
顔の一部に特殊なメイクを施しているように見える顔。自己主張しているような、統一性のない独特な服装。
そして、服に覆われていない肌の部分に刻まれた、個々に異なる刺青。
帰路を急ぐ人々とは何もかもが違う、異形の集団だった。
「……バヅーとバダーが動いているようだな」
まるで軍隊の司令官が着るような服装の男が、妙に威厳のある口調で語る。

「他にも、見た。ザインにビラン、ギイガ、ベミウもいた……」

それに続くのは、黒のコートに黒の帽子、黒の傘を持った男だ。太陽の光を避けるかのように傘をさしているが、向かいのビルの硝子に映った太陽の光の方が彼に相当なダメージを与えているように見える。

「どいつもクウガにやられたはずだ……なぜ生きている……」

「どーでもいーじゃない。そんなことー」

間延びした話し方をするのは紫色の上着を羽織り、革のミニスカートを履いた女だ。前の二人の会話の内容など気にしない様子で、左手に持った扇子を扇いでいる。

「ゲゲルに失敗した奴らなんて、どーでもいいしー。あたしのゲゲルに楯突くんなら、殺すだけだからー」

物騒な言葉を平然とつぶやくが、周囲の人々はそれを気にせず足を進めていく。その流れに便乗するかのように、一人の男が現れる。黒いニット帽に黒いマントのような衣装、首には真っ白なマフラーを巻いている彼もまた、周囲から浮いて見える存在だった。

「ねぇー、あたしのゲゲルはまだー？」

「バルバがこちらに戻るまで、ゲゲルはおあずけだ」

女性の発言に対し、やってきた男はそのように応える。その発言に、女性は眉をひそめた。

「一体、なにしにいってんのー？」

「我にも、考えが浮かばない」

女性の発言への応えは、女性に何の解決の手がかりも与えないものだった。男性も言うつもりがなかったためか、悩む素振りも見せない。

「クウガにやられた奴らが再び動いていることを、バルバは知っているのか？」

「どうだろうな……」

軍服の男の威圧感の前にも緊張しない様子で応える男。本当に何も知らないように見えるが、ゲゲルの進行を管理する立場故にそれを隠している様子さえも窺える。

「いずれにせよ、我々の活動の邪魔になるものは、排除される……それだけのことだ」

話を勝手に終わらせ、再び人ごみの流れに消えていく男。その様子を見届けていた他の男女も、男同様に人ごみの中へと消えていった。

ＰＭ０６：１４　東京都西文京区

雄介は一条との会話の後、城南大学に戻っていた。まだ大学に残っているであろうジャンに碑文の解析結果の閲覧方法を教えてもらうためである。

しかし、実際に行ってみれば研究室に灯りはなく、ジャンの影も見えなかった。未確認生命体の警戒態勢が解かれたこともあるだろうが、何よりも彼なりに多忙なのだろう。今度余裕がある時に教えてもらおうと考え、ビートチェイサーをポレポレに向かって走らせていた。

ポレポレにあと数分で着くであろう交差点の赤信号に引っかかり、雄介は交差点手前に引かれた白線の前に停車させる。

「……」

停車している間、雄介は今日の出来事をぼんやりと考えていた。

突如として蘇った未確認生命体第６号と第４１号。彼らが一体何故蘇ったのかが雄介を悩ませていた。

雄介が身につけているアークルに組み込まれたアマダムは、確かに傷の回復力を増強させる役割を果たし、雄介はその力で一度死んだ状態からの蘇生を体験している。それと似たようなものが未確認生命体の腹部にも埋め込まれていることから、未確認生命体にも同様の効果が現れていても不思議ではない。

しかし、ここではその説は成立しない。なぜなら雄介がクウガの力を使って倒してきた未確認生命体は、全員が爆散している。すなわち、アマダムに似た石も爆散していることになるため、回復を増強させる手だてはなくなっていると考えた方が良い。

別の可能性としては、第２６号の時と同様の現象が発生したことが考えられる。

未確認生命体第２６号は白色のクウガ－グローイングフォームによ

って爆散した、きのこの能力を持っていた未確認生命体だ。爆散した影響できのこの生殖細胞である胞子が飛散したことと、未確認生命体独自の強い生存本能が組み合わさったことにより第２６号のクローン体という異種が誕生したことがあった。

しかし、この現象は第２６号自身の能力があってこその結果である故に、他の未確認にも適用するとは考えられない。仮にあったとしても、クローン体のようなものが出来るはずだが、あれはどう見ても第６号と第４１号そのものだった。

いずれにしても、情報が少なすぎるのだ。今回の事件に関しても、未確認生命体に関しても、クウガに関しても、だ。結局、今出来ることは足りない頭で精一杯悩むことしかない。

「……」

ふと、雄介は考える。

未確認生命体は一体どうやって生まれてきたのだろうか、と。

これまでの検証で未確認生命体は人間によく似た体組織を持っていることが判っている。同じ体組織を持つ以上、体の性質は変身することを除けばほぼ同じである。

人類へと進化する過程で、一体何が起きたのか。そこに未確認生命体に近づく重要なヒントがあるはずなのだ。

碑文の中にそれに類した文章があるか確認してみよう、と雄介は自分の中で結論を出した。

『キャアアアア！！』

「……！？」

その刹那、女性の悲鳴が聞こえた。交差点の信号が青に変わると、雄介はビートチェイサーをUターンさせ、悲鳴が聞こえた場所へと猛スピードで走らせる。

走って間もない場所に、両手で口をおさえ、立ち尽くしている一人の女性を発見する。悲鳴の主であると判断した雄介はビートチェイサーを停め、ヘルメットを脱ぎ捨てた後、彼女に話しかける。

「大丈夫ですか？何があったんですか？」

近くの街灯によって照らされた彼女の表情は恐怖の一色で染められており、ガタガタと震えている。

ただ一点を見つめて。

「……っ！？」

彼女の視線を追い、一方通行となった狭い路地を見る雄介。そこにいたものに、雄介も驚愕していた。

人間の身長を遥かに越す巨体。

猛獣のようにぎらつく目と歯。

全てを引き裂きそうな鋭い爪と木の幹の用に太い腕。

そして、感じたことのない威圧感。

その謎の生命体が、太い腕で持ち上げている何か。

それは、首を鷲掴みにされた女性だった。

既に抵抗する力を失ったのか、女性は両手をダランと下げていた。
それでもその生命体は手放す様子を見せず、さらに腕に力を込めようとした。

「うおりゃあぁ！！」

その瞬間、雄介がその生命体に体当たりをぶつける。雄介の存在に気付いていなかったそれは、予想外の敵襲に対応しきれず体当たりを直接喰らい、その衝撃で女性から手を放してしまう。地面に倒れ込む女性を受け止めた雄介は、彼女を抱えたまま生命体の腹部を蹴り生命体との距離をとる。

「ビガラ……！」

活動を邪魔した雄介の方を向く。女性の安否を確認した雄介は彼女を地面に寝かせ、生命体の方を向き直った。

「未確認か……？」

生命体の発言を聞き、雄介は確信した。目の前にいる生命体は、雄介や一条らが戦っている未確認生命体の同族ということを。

「ジャラゾギダベジレ、ビガランギボヂゼヅグババゲデロザグ」

感じていた威圧感を雄介に向けて放つ未確認。その力の大きさに雄介は思った。

この未確認は、これまでに戦ってきた未確認のどれよりも手強いと。

未確認がこちら側に手をかざすと同時に、雄介も腹部に手をあてる。

「グ……ボンバドビビ……！」

しかし、対峙していた未確認が苦しそうな声をあげる。すると、未確認の腹部から、周囲の影よりも黒い霧状の気体がもうもうと上がり始めていた。

「なんだ……？」

発生した事態に雄介もそれに驚く。そんな雄介に目もくれず未確認は、腹部からの霧を抑えようと必死だった。

「ビガラゾボソグボザヅギザ……」

そう言うと未確認の体に変化が起きた。これまで確かに存在した全て体が腹部から発生した霧のような気体に変わり、周囲の光景へと溶け込んでいった。

「……っ！」

慌てて走り出す雄介。しかし未確認が立っていた場所にはもう何も残っておらず、そこにあるのはいつもの夜の静けさだけだった。

EPISODE5　少女

時刻不明　場所不明

風の吹き抜ける音が、遠くの方で聞こえる。その音に数瞬遅れて、生い茂った木々が揺れ動き、葉を地面にまき散らす。

木から地面に落ちたその葉を踏みつけながら、道を歩いていく人影があった。

足下まである真っ白のロングドレス状の服に加え、まるで白鳥の羽根のような白色の首巻きと、真っ白なストール。

そして、端整な顔の額にバラの刺青を刻んだ女性である。

道とは呼べない道を、立ち止まる素振りを見せず黙々と歩いていく女性。前に進む度に、後頭部に結えた黒い髪や衣服が後ろに靡く光景は、周りの風景に比べて異彩を放っていた。

そして、陽も完全に沈もうとする直前に、彼女はある場所で停止した。

そこは険しい山道ではなく、大きく見開いた荒野であった。

視線を下げれば周囲の地形の影響で常に吹きつける風が荒野に積もった砂埃を動かし、また別のところに積もらせている。遠くに向け

れば、まるで外界から隔離するために用意されたような数メートルの高さの壁が立ち並んでいる。

人影はその壁に向かい、ただただ歩いていく。人影が立ち止まったのは、人一人が余裕で入るほどの風穴が空いた場所だった。

「……」

人物は、風穴を黙視する。無表情な顔を変えず、静かな空間の流れを変えず、時がただただ過ぎていく。

数分が経過した後、人影の背後の空気が変化した。この場所に立ちこめていた風がある一点を中心に、まるで竜巻のように渦巻き始める。

「あれが、動き始めたようだな……」

壁の風穴を見つめていた人影が、声を上げる。独り言のように呟くが、背後にあるもう一つの気配に対して話しかけているようでもあった。

「前の戦いではお前が勝ったが、今のお前では無理だろうな」

その言葉に対し、背後の気配は無反応だった。それを女性は肯定したと勝手に判断し、次の言葉をつづる。

「しかし、我々の邪魔をした奴が、またも目覚めるとは……」

言葉内の対象に敵意を見せながらも、どこまでも冷静に徹する女性。背後の気配は、彼女に意思を伝えているかのように渦巻く風の音が

大きくなる。

「今のクウガやリントのように、奴も変わっていれば……か」

背後の気配の意思を口にする女性は、どこか可笑しそうに言う。しかし、それを表情には出さず、背後を振り返る。

そこにいたのは、全身を白い衣服で包んだ青年だった。穏やかな笑顔を浮かべる反面、彼は女性が放つ威圧感よりも濃く、重く、そして恐ろしいものを放っていた。

「いずれにせよ、お前のやることは一つだ」

その威圧感に怯むこともなく、女性は青年の方へ歩き出す。

そしてすれ違おうとする瞬間。「はやく、力のない者を始末しておくんだな。ダグバ」

ダグバと呼ばれた青年の耳元でそう呟く。その発言に青年は歯を見せて笑い、女性が一歩踏み出す瞬間青年の姿は消えていた。

青年の気配がなくなり、立ちこめていた風がやむ。そのようなことを気に留める様子もなく、女性はもと来た道を再び歩き始めていた。

ＡＭ０９：０７　関東医大病院

いつも雄介が待たされる関東医大病院の診察室では、彼と椿が今に

もひっ付きそうな距離で顔を並べていた。そして二人はあるものを凝視していた。

「問題なし、だな」

「問題なし、ですか」

椿の発言にオウム返しをする雄介。二人が見ていたのは様々な箇所から撮影したレントゲン写真、およびＭＲＩによる診断結果だ。

椿いわく、これらの写真の主の身体状況は至って健康であり、内面的にも全く損傷は診られないらしい。

ただし、これは雄介の身体を映し出したものではないのだが。

「お前の言うことが正しければ、これは奇跡と言ってもいいぞ。未確認に危害を加えられて無傷だったやつなんて見たことがないからな」

「えぇ。でも、ほんっとうに安心しました。俺も一瞬、もうダメかと思いましたし」

顔を密着寸前の状態にしたまま、目だけを相手の方向に向けて話す二人。その状態が椿が写真を見ている約５分間続いていたが、椿が写真から顔を遠ざけることによって状態は解除される。

二人が見ていたのは、雄介が昨夜目撃した謎の未確認に襲われた女性の診断結果だった。

誰がどう見ても殺されたようにしか見えなかった彼女は、虫の息の

状態であったにも関わらず生きていたのである。病院に運ばれてきた彼女を見た椿も、絶望しかけるほどの状態であったが、彼女には何の外傷もなく内面にも全く異常が見当たらなかったのである。

彼女のような、未確認に直接危害を加えられ、無傷で済んだケースは過去にないため、椿の言う通り、これは奇跡としか、表現のしようがなかった。

「じゃあ、もう彼女は退院出来るんですか？」

「普通なら、退院させるところなんだが……未確認に関わっていたとなると簡単に退院を許すわけにはいかないな」

椿の一言に雄介は同意したような、しかし少々不安げな表情を見せた。

未確認によって何か危害を与えられた場合は、通常の検診では安全を確立できないのである。以前の第４２号の事件の場合がまさにそれの典型的なケースである。

『脳内に刺された凶器が４日間経過した際に脳内で成長し、脳を傷つけて殺害する』というものだったが、その凶器は現代医療の技術を駆使しても発見されなかったのである。

このケースを見ると、今回の被害者の女性にも同様の現象が起きている可能性が考えられる。故に椿は退院させることを容易に許可しようとしなかったのだ。

それについては雄介も重々把握していた。把握しているからこそ、胸の辺りがギュッと詰まる感覚が雄介にはあった。

４２号の時みたいに、また何も出来ないのではないか。
何も出来ないまま、また笑顔が奪われてしまうのではないか。
それが、雄介にとってはたまらなく不安だったのだ。

「すまん、遅くなった」

空気が重くなりかけた時に一条が診察室に入ってきた。徹夜で捜査に加わっていたのか、目の下には隈が出来ており、いつもビシッと決めているスーツもどこかくたびれた様子だった。

「お前また徹夜したな。そのうち身体ぶっつぶれるぞ」

「問題ない、徹夜ならもう慣れた」

一条の身を心配した椿だったが、一条はいつもの様子で切り返す。チラッと見ただけで相手の状態が分かるのは医者の経験だけでなく、二人の間にある友情が深いからであろう。

「それよりも、前頼んでいた件はどうなった？」

「あぁ、例の事件の遺体を直接視てきた結果についてまとめてみたんだ」

一条の言葉に、椿は机に置いてあった封筒からクリップで綴じられ

た数枚の書類を抜き取った。それを受け取った一条は、隣からのぞき込んできた雄介と共に書類に目を通す。

「例の行方不明事件に関する3つの遺体の傷の状況だが、それぞれが21号、22号、23号によるものだと確信した」

資料に掲載されていたのは以前の21号、22号、23号の事件の際の被害者の傷跡について掲載された写真と、今回の被害者の傷跡の写真。見る度に不快感を与えるその傷跡の残虐さは、殺戮を楽しんでいる未確認生命体そのものを現しているようにも見える。

「これほどまでに未確認が蘇った理由……やはり五代が昨日見た未確認と関係があるのか？」

写真を見終わった一条は、雄介に視線を向けながら訊ねる。訊かれた雄介も悩んでいるのか苦い顔を一条に向けた。

「それとだ。少し気になることがあってな」

「なんだ？」

「蘇った未確認の被害者を診てみたが、過去の未確認と同じ手口によって殺害された被害者は総数の一割にも満たなかった」

椿の発言に一条と雄介は眉間に皺を寄せる。

「一割にも満たない……？」

「正確に言うと、復活が確認された未確認一体につき一人ずつが過去と同じ手口によって殺害されている。41号に至っては同じ手口

で殺害された被害者は一人も確認されていない」

それを聞いた雄介は以前の第６号との戦闘を思い出す。戦闘の最中、第６号は自慢の脚力を使った戦法を全く行わなかったのだ。

第６号だけではない。

復活した未確認生命体全体までもが自身の主張とも言える殺し方で、人間をほとんど殺害していないのである。

それに加え、一条ら未確認生命体対策本部が都内の防犯カメラに映し出されたそれらのいずれにおいても腹部の装飾品が付けられていなかったことが新たに判明した。

これらの相違点が意味するものは果たしてなんなのか。

それに答えられる人物はこの場にはいなかった。

「今、俺が持っている情報はこんなもんだな」

「わざわざすまない。また何かあれば連絡する」

椿への話が終わったのか、一条が今度は雄介の方に向き直り、話しかける。

「ところで五代、この後時間あるか？」

「はい」

「少し話したいことがある。椿への用が済んだら、下に来てくれな

いか」

「じゃあ、一緒に行きましょう。もう用事も終わりましたし」

言いながら、雄介は立ち上がる。そして、椿の方に向き直ってこう言った。

「椿さん、彼女のことよろしくお願いします」

「あぁ、任せとけ」

その言葉を最後に雄介と一条は診察室から出ていった。

「君は、今回の未確認生命体の事件のことをどう思う？」

診察室から出て一階に降り立った時に、一条が静かに言い放った。それに対し、雄介は苦そうな顔を向け、一条にこう返した。

「なんか、いつも以上に分からない行動をしてますよね……警察の方で何か分かったこととかありますか？」

「対策班も、現段階では対処方法の立案で手一杯の状態だ。未確認の行動パターンが過去のものと変わっているのなら対処方法もそれに応じて変えなければいけないからな」

「そっか……」という小さい声が雄介の口から漏れる。雄介に情報

を与えるのが基本、自分であったためか、一条は情報を何も掴めていないことに責任を感じた。

「それより昨日、主犯格らしい未確認に遭遇したそうだが、どうだった？」

一条は気分を紛らわすために、話を本題へと切り替える。

「うまく言えないんですけど、多分今まで戦ってきた未確認とは比べ物にならないくらい強い気がします」

「実際には、戦っていないのか？」

「なんか変身する前にそいつの体が霧みたいになっちゃって、いなくなっちゃったんです」

雄介の発言に、一条は表情を曇らせる。少しは事件を解決する糸口のようなものが手に入るかと思っていただけに、少々期待はずれだったようである。

「そうか……しかし、敵の姿を見つけたんだ。何かのヒントにはなるだろう」

言いながら一条は胸ポケットから警察手帳を取り出し、雄介から聞き出した未確認の手がかりを記入していく。手帳の中には他にも、行方不明事件の被害者と行方不明者の詳細、復活した未確認生命体の名称とそれを確認した日時、普段の未確認との相違点など現在判っている情報が細かく書かれている。

「……どうした？」

雄介が警察手帳を覗きながら何かを考えていることに気付いた一条は、雄介に訊ねる。

「仮に主犯格の未確認が他の未確認を蘇らせているとしたら、何の目的で他の未確認を蘇らせているんですかね？」

その発言に、一条は眉を寄せた表情となる。

「どういうことだ？」

「奴らがしてるゲームって人を殺すことが大きな目的ですよね。もう倒した未確認を蘇らせたって主犯格の未確認にはなんのメリットも生まれなくないですか？」

「確かに自身のゲームの達成のためには、返って邪魔になる可能性もある。仮に、倒れた未確認を蘇らせて何かをするのなら力の強い未確認を蘇らせた方が効率的だが……」

「蘇った未確認は、強さがバラバラ……もしも、戦力の頭数を増やすために比較的力のない未確認も蘇らせているとしたら、４１号とかみたいにかなり強い未確認はほとんど全員が蘇っているんじゃないですかね？」

独り言のように呟きながら行われた二人の会話は、雄介から一つの可能性が示唆されたことにより一度終結する。

「しかし、長野で起きた大量虐殺事件には全く逆の意図があるようにしか考えられない。これらの事件が一体何を意味しているのか……」

一条がそこまで言いかけた時、雄介のビートチェイサーから無線機に通信が入る音がした。会話を中断し、雄介と一条は無線機に耳を傾ける。

『全署員に連絡。復活した未確認生命体に関する緊急会議を行います。関係者の方は直ちに警視庁、未確認生命体合同捜査本部までお戻り下さい。繰り返します……』

「すまないが、俺は本部に戻る。何か決まり次第、報告させてもらう」

「じゃあ、俺は碑文の結果を見てきます」

雄介の発言の後に一条は一度頷く。パトカーに乗り込み、道路に出ていく様子を見届けると、雄介はビートチェイサーのミラーにかけていたヘルメットを被ろうとする。

「五代！！」

その瞬間、椿が非常に慌てた様子で病院の入り口から飛び出してきた。余程のことがあったのか、服装が乱れ、額に大量の汗を浮かべている。

「ここに彼女が来なかったか！？」

椿の言う彼女。それは昨日未確認に襲われた少女のことであると、雄介は一瞬の内に理解した。

「彼女がどうかしたんですか？」

「病室からいなくなった！」

椿の言動に雄介の表情は緊張感が張り詰めたものへと一変する。

「今手の空いている人に捜してもらっているが、未だに見つかっていない！もしかしたら、彼女は病院を出て行った可能性もある！」

「何時頃からいなくなったんですか？」

「朝食の時には病室に居たのを確認している。居なくなったとしたら、7時半から9時半までの間だ」

「分かりました、俺は外を捜してみます」

「頼む！」

その言葉を最後に、雄介はヘルメットを被ると、勢いよくグリップを捻る。加速していくビートチェイサーが、そのほんの数秒後には椿の遥か彼方を疾走していた。

深呼吸をする。水分に含まれた塩分の匂いが胸に広がり、それをまた吐き出す。

潮の香りを運ぶ風を心地よさそうに浴びる。彼女の黒く長い髪が空中を泳いでおり、太陽の光を反射させ輝く様子は、まるで絵の中のモデルのように一層際立たせて見せるに違いない。

「……」

寄せては帰っていく波を凝視する。何度も何度も繰り返し、何度も何度も帰っていく動きは、自分が知っている海そのものだった。

「……」

自身を支える両足に鈍い痛みが走る。自分が目覚めた、白い壁で囲まれた部屋からここまで休むことなく歩いてきたのだから、疲労が蓄積されたせいだ。そう解釈する。

解釈すると同時に、彼女は歩いてきた道程を思い出していた。

見上げれば、首が痛くなるほど高く積み立てられた建物。

人の歩みを止める、三色の灯りの物体。

耳障りな音を発しながら走行する箱状の物体。

大音量とともに道端で踊り続ける男女の集団。

どれもが、自分の知っているものではなかった。自分が知っていたものや大切に思っていたものは、とうの昔に消え去っていたのだ。

結局、昔のまま残っていたのは、海だけだった。それでも、彼女は嬉しかった。昔と変わらなかった場所があったのだから。

「……」

ふと視線を右に向ける。そこには、腕を組みながら歩く男女がいた。楽しそうに話す二人の表情は本当に幸せそうで、見ているこちらまで幸せになってしまうほど、二人の笑顔は輝いていた。

その光景に、自分の思い出が重なる。

セピアトーンの光景の中で、幸せそうに微笑む男女が互いに手を握り合う。そして男女は言葉を口にする。

『……』

『……』

しかし、二人は無言だった――否、聞こえているはずの言葉を思い出せないのだ。

その思い出を浮かべる少女の表情が不安げに歪む。そして確信する。

――自分は、また記憶を失ってしまったのだと。

「……リク……」

呟くように、想い人の名を口にする。

すがるように、首にかかった貝の首飾りにそっと触れる。

――会いたい。そんな儚い祈りを込めながら。

「キャアアア！！」

突然聴こえた女性の悲鳴に彼女はハッとし、悲鳴の方向を見る。

彼女の視線の先には、先程のカップルがいた。しかし、浮かべていた笑顔は跡形もなく消え去り、今は恐怖一色に染まっていた。

「来るな……来るなぁ……！」

後ろを向き、そう叫びながら女性の手を引き、走っていく男性。

――その二人の背後には、二つの異形の存在が歩いていた。

一方は紫色の肌を持ち、人間でいう頭部から生えた髪のような物は背中まで伸び、胸部と腰には黒い水着のような衣類を着用しており。

もう一方は赤いマフラーのようなものを首に巻きつけ、黒色に近い濃い緑色の身体をしていた。頭部からは昆虫の触角のようなものが生えており、紫色の異形が女性のような体格をしているのに対し、こちらは男性のような体格をしていた。

――視線が、二つの異形のそれらと混ざり合う。その瞬間、少女の全身が金縛りにあったかのように動かなくなる。それらの存在が危険と無意識の内に理解しているのにも関わらず、足がガクガクと震え出し、動かなくなる。

逃げていた男女が自分の横を通り過ぎる。助けを求めようにも、恐怖に支配された身体は言うことを聞かなかった。

動けない彼女を格好の標的と認識した異形らはじっくりと近づき、そして目の前に立ちはだかる。

「……っ！」

緑色の異形が腕を軽く振るう。その一撃で彼女は数メートル吹き飛び、地面に落下した。ダメージを受けた左腕の痛みが、立ち上がらせることを邪魔し、少女はもがき苦しむ。

そうこうしている間にも、お構いなしといった様子で異形らが再び近づく。しりもちをついたままなんとかその場を後退るも、徐々に距離は詰められていく。

そして……

「うおりゃあああぁ！！」

空間に絶叫が木霊した。

五十メートルは軽く越える距離を、勢いをつけた鉄の固まり――ビートチェイサーが軽々と跳躍していた。その勢いのまま、ビートチェイサー全体を異形らに向けるように身体を捻ると、異形らは抵抗も出来ないまま吹き飛ばされ、海面に叩きつけられる。

「大丈夫？」

それを確認した運転手――雄介は、座り込んでいる少女に話しかける。彼の心配している様子が伝わったのか、少女は首を縦にふった。その様子を見た雄介は安堵の息を静かに漏らす。

しかし、海面付近で立ち上がった異形ら――復活した第３８号と第４１号を黙視すると、表情を険しいものへと一変させた。

「早く逃げて！」

無理やり少女を立たせて走らせる雄介。身体の自由を取り戻した少女は雄介に従い、車道に向かって走り出す。

その様子を見届けた雄介は、未確認の方へと向き直る。

腹部に両手を翳すことにより、アークルが出現する。左前方に突き出した右手を右の方へ、アークルの右側へと移動した左腕を左の方

へと移動させる。

「変身！」

右腕を左へと移動させた左腕に重ねる。アークルに埋め込まれたアマダムが赤く輝くと同時に、雄介の身体が赤いクウガへと変わっていく。

そして、赤いクウガへと変身を遂げた雄介は未確認の方へと走り出していた。

「……」

避難したはずの少女は、その光景を見ていた。

自分を襲っていた二つの生命体が、新しくやってきた人間に吹き飛ばされたこと。

そして、その人間が二つの生命体と同じような生命体に変化したこと。

今もその二体と一体は戦い続けている。数では不利なはずの一体は、二体を相手に怯む様子もなく果敢に闘っている。二体のうちの一体

を遠くへ吹き飛ばし、もう一方の相手をするという戦いに慣れた戦い方だった。

「……っ！」

その光景をみて、再び脳裏に映像が再生される。

――山の谷のような場所で、多くの人影がある。

そのどれもが、異形。

先程、自分を襲った異形に酷似した大量の生命体全員がある一点を凝視していた。

そこには一人の人間が立っていた。異形全てから放たれる異様な殺気をものともせず、堂々と佇んでいた。

生命体がその人間に向かって一斉に動き出す。人間を軽く超越した能力を持つ生命体の行動に、その人間の死が容易に脳裏に浮かぶ。

しかし、一瞬にして生命体の数体が周囲に吹き飛んでいた。それらの生命体に目をくれず、人間がいた場所では、生命体が何かと戦闘を行っていた。

その中心にいたものは。

赤い身体を持ち、同色の赤い複眼を持っており。
頭部に生えた巨大な角は天に向かって尖り。
腹部には、赤い石をはめ込んだ帯状の物体が取り付けられた生命体。
その生命体の名を彼女は知っていた。

「クウガ……」

脳裏の中で、目の前で生命体と闘う戦士を見つめながら、少女はその戦士の名前を口にした。

EPISODE6　安心

「変身！」

叫び終わった数瞬後、雄介の身体は赤い複眼に赤い鎧を身にまとった古代の戦士、クウガへと変化した。変化を終えたクウガは戦闘の構えをとりながら、二体の未確認生命体を見据える。

――かつて倒したとはいえ、強力な未確認を二体まとめて戦うのは無謀すぎる。

咄嗟に、判断を下したクウガは一体ずつ確実に倒す戦法をとることにした。

「おりゃああ！」

眼前の３８号に向かって飛びかかるクウガ。３８号の両肩を押さえ込んだクウガは力の限り、３８号を押し続ける。３８号は抵抗できないまま後ろに押されるが、精一杯両足に力を込め、クウガと３８号の動きは停止した。

その瞬間にクウガの手刀が３８号の首にヒットし、３８号は怯んでしまう。その追撃に右膝をぶつけることで３８号は後退する態勢となる。

「……っ！」

３８号がうずくまった瞬間、クウガの背後から４１号が跳び蹴りをかましてくる。当たる寸前に回避行動をとったものの、完全にかわ

すことが出来なかったクウガはバランスを崩し、砂浜を転がる。

立ち上がろうとするクウガに４１号が左足の中段蹴りを放つ。クウガは右腕でそれを受け止め、左拳をぶつける。４１号が少し後ろによろめく間に立ち上がると、４１号に蹴りを入れようとする。

しかし、その瞬間……

「うぉ！？」

クウガの足下の砂が弾け飛ぶ。そこには、まるで細い縄状の何かが炸裂した後がくっきりと残っていた。

４１号のいる方向とは別の方向を向く。そこには、鞭のような武器を手にした３８号がこちらを見据えていた。

手に持った鞭を振るう３８号。クウガはそれを軽い身振りでかわすが、３８号は再び鞭を振るう。

「……？」

しかし、３８号の攻撃は自身とは全く別の砂浜に命中した。鞭を振るう行為を３８号は幾度も繰り返すが、そのどれもがクウガに掠りもせず砂浜に直撃し、その内の何発かは４１号の付近に、直撃する。

その光景を見ていたクウガは、３８号自身が鞭に振り回されているように感じる。実際に３８号は再び鞭を振るうために数秒の時間を要していた。以前に戦った３８号のそれとは何もかもが段違いなのだ。

その数秒間という時間をクウガが利用しないわけがなかった。

鞭が全く違った方向に振るわれた瞬間、３８号に向かって跳躍する。鞭を手元に引き戻そうとしていた３８号に右拳を繰り出す。仰け反った３８号を横目に、再び３８号の側に戻った４１号にも拳を繰り出すものの、４１号は上半身を屈め、それを回避する。

体勢を立て直した４１号は右足をクウガの腹部に叩きつけた。その勢いに負けたクウガは後退するがその先にいた３８号が複数回折りたたんだ鞭でクウガの首を締め上げる。

「グッ……！」

戦闘技術が格段に落ちたとはいえ、人間の力を大幅に上回った怪力はクウガの体力を確実に削っていく。抜け出そうとするクウガに抵抗するように、３８号も両腕に力を加え、より強くクウガの首を締め上げる。

その隙に４１号はクウガとの距離を空けるべく、後ろ向きに跳ぶ。４１号は勢いをつけ、クウガを目掛けて大きく跳躍する。

そして、ドラゴンフォームのクウガを地面に叩きつけた、マイティキックに酷似した体勢をとり、４１号はその一撃をクウガに浴びせようとした。

「く……うあぁぁああ！！」

クウガが叫ぶ。その瞬間、クウガの腕から電気のような閃光――金の力の断片である電流を放出させた。

それに動揺した３８号は腕に込めた力を一瞬緩めてしまう。

その一瞬を、クウガは見逃さなかった。

「はっ！！」

肘打ちを３８号の腹部に叩き込む。まともに食らった３８号は完全にクウガを締め上げる行為を放棄し、クウガを解放する。

体勢を立て直したクウガは迫り来る４１号の蹴りを手刀で叩き落とす。相手が体勢を立て直す前にクウガは左拳を４１号に叩きつけた。まともな体勢でそれを受け止められなかった４１号はフラフラと後退る。

「うおりゃああ！！」

そして、追撃の回し蹴りを４１号の胸部に叩きつけた。全身のバネを総て活用したその一撃は４１号を彼方へと吹き飛ばすことに成功した。

直後に３８号が背後から襲撃をかけるが、クウガは人間の何倍にも研ぎ澄まされた感覚でそれを察知し、それを避ける。お返しと言わんばかりに３８号の腹部に何発も拳を繰り出し、最後に顔面に一撃をぶつけた。

海面に叩きつけられた３８号を見据え、クウガは右手を左前方へ突き出し、左手をアークルの右方へとあてがうと同時に右足を後方へと移動させる。

腰を低くし、両腕を広げることでバランスを取る。そして、クウガ

は右足へと意識を集中させる。徐々に熱くなる右足に、力が漲っていく。

――今度こそ、倒す。

心でそう誓い、立ち上がろうとしている38号に向かってクウガは走り出そうとした。

しかし……

「クウガ……」

自身の名を呼ぶ声が聞こえた。

通常の人間の聴力を何倍にも向上したクウガのそれは、その声をはっきり捉え、声のした方向へと顔を向ける。

そこにいたのは、主犯格の未確認や３８号と４１号に襲われ、自分が捜していた少女だった。

そして、それを理解した瞬間、クウガの脳内にシルエットが浮かぶ。

大量の未確認生命体とクウガが戦っている光景。

自らの拳と脚を使う戦士の身体は赤く。

細長い棒のようなもので敵を薙払う戦士は青く、全体的に細い。

拳銃のような形状の武器で敵を射抜く戦士は緑色で、左肩を強化したような姿。

大剣で敵を切り裂く戦士は紫色で重々しい鎧をまとっていた。

そして、それを彼方から見つめるひとつの影があった。戦士と敵が戦っている様を傍観するそれは、その状態をしばらく維持していたかと思うと、戦士のいる場所に向かって手を伸ばす。

その腕も、まさに怪物のそれだった。伸ばした手を広げると、それからじわじわと黒い靄のようなものが滲み出す。

そして、それを戦士に向けて放った。戦士はそれに気付くが、その瞬間に放たれたそれが、周囲にいた怪物を含めて戦士を包み込んだ。その靄はやがて視界を覆い尽くし、何も見えなくなった。

――その暗闇の中に、一滴の雫が落ちた。

どの水よりも澄み切っており、どの宝石よりも輝いていたその雫は、暗闇に波紋を生ませた。

波紋の中心に、人影が現れる。その人物は、泣いていた。澄み切った、美しい涙を流しながら、暗闇の中で俯きながら泣いていた。

やがて、その人物が顔を上げる。

――その人物は、雄介が助け出した少女の姿だった。

「……っ！」

そこで、クウガの意識が現実へと引き戻された。ほんの一瞬の内に脳裏に浮かんだ情報が全身の動きを停止させた。

「38号は……！」

再び思考という活動を開始したクウガは標的の姿を探す。しかし、先程まで３８号がいた場所には何も残されていなかった。

敵の気配が完全に消えていることを確認したクウガは変身を解き、雄介へと戻る。そして、雄介は救助した少女へと視線を移動させた。

――その瞬間だった。ドサという音を立てて、少女が砂浜に倒れ込んだのは。

「……っ！」

咄嗟に、少女のもとへ走り出す雄介。

「大丈夫！？ねぇ、大丈夫！？」

少女の側に駆け寄った雄介は、彼女の身体を揺さぶりながら、必死に呼びかける。しかし、意識を失った彼女は両の瞳を閉じたままで、雄介の呼びかけに応じることはなかった。

湿気の強い臭いが立ち込めた薄暗いトンネルの中を、２つの影が歩いていた。しかし、その２つの影の歩き方は、どこか身体に負担を抱え込んだような、不安定な歩き方だった。

トンネルの中腹部辺りで二つの影は歩みを止めた。壁に身を任せ、身体を壁で支えながらズルズルと座り込む。

二つの影は胸部や腹部辺りを入念にさする。これで痛みが和らぐことがないと知っていながらも、必死に痛みを紛らわせようとする。

なぜ、このようなことになってしまったのか。

その考えが脳裏に浮かんだ。痛みを意識しないように、考えをそちらに必死に切り替えようとするがそれすらも痛みが阻む。そのせいで、まともな思考を行うことも出来ない二つの影は、いつまでも全身に響く痛みに抗い続ける。

――だが、その行為も長くは続かなかった。

「けっきょく、まけたか……」

ジメジメと湿ったトンネル内に声が響き渡った。

突然響いた声に、二つの影が一斉にその方向を向く。

――そこには、一つの黒い影があった。入り口からの光が殆ど届かない暗闇の中でも一層黒く見える霧のようなものを纏うそれは、軽く二メートルを越す巨体に頑強そうな骨格、それ自身が発光していないにも関わらず爛々と輝く双眸に、口から覗く鋭い歯。

周囲の暗闇から切り離されているように見えるその影は、現実の中に迷い込んだ異世界の存在であるようにしか思えなかった。

「いくらできそこないとはいえ、にたいのみでは、くうがをたおせなかったようだな」

まるで日本語を覚えたばかりの外国人が話しているかのような、舌足らずな発音の声がトンネル内に響く。しかしその声は、二つの影を見下しているような印象を抱かせるようなものだった。

痛みが走る身体に鞭を打ち、二つの影が壁で身体を支えながら何とか立ち上がる。

――こんなことになってしまったのは、全て目の前にいるこいつのせいだ。

二つの影の頭の中にそのような考えが浮かぶ。現在の事態を作り上げた全ての原因を目の当たりにして、二人は失っていた闘志を敵対心という形で甦らせていた。

しかし……

「……ッ！？」

身体が全く動かなかった。今すぐにでも飛びかかり、殴りつけたい衝動が身体中に溢れているのにも関わらず、二つの影は全く動けなかったのだ。

二つの影の、身体の至る所がガクガクと震え出す。気分がおかしくなりそうなほどの濃密な威圧感をまともに浴びた二つの影は、ただただその威圧感に怯えることしか出来なかった。

衝動と恐怖が自分達の中でぶつかっていた最中、目の前の影は一歩ずつ自分達のもとへと歩み寄ってきていた。

そして、二つの影の横をその影が通り過ぎようとした瞬間……

血肉が裂け、何かをえぐり取るような音が二回聞こえた。

「やはり、だめか……」

二つの影とは別の影が、呟く。その声は、どこか残念そうな感情を

含めたような声であるようにも聞こえる。

「まぁいい……じかんをかければ、なんとかなる……」

再び歩き始めた影は、一直線にトンネルの出口へと向かっていく。

その影の背後には、生気の失った二つの影が地面に横たわっていた。

ＰＭ３：４２　関東医大病院

「……」

清潔に保たれた病室に設置されたベッドで、先程、未確認生命体に襲われた少女が眠っていた。世の中を騒がせている恐怖の権化とも言えるそれに襲われたことが働き、彼女の表情は疲れているように見えた。

その少女の眠っている様子を雄介は静かに、ジッと見つめていた。

「五代」

静かな空間に、雄介を呼ぶ声が響き渡る。声のした方向を見ると、病室の入り口に一条が立っていた。

「一条さん」

「彼女の様子はどうだ？」

「ずっと眠ってます。命に別状はないそうですけど……」

未だに目覚めない少女を、雄介は心配そうな面持ちで見つめる。それにつられて少女の方に目を向けた一条も、どこか心配している様子だった。

３８号と４１号との戦いの後、雄介は速やかに関東医大病院にいる椿に、病院へ早急に少女を運ぶようにと連絡をとっていた。彼女を見つけた際の準備をしてくれていたため、彼女は受け入れ態勢が万全に整った状態で病院に運びこまれ、なんとか事なきを得ることが出来たのである。

だが、彼女はその件以来、ずっと眠り続けている。椿の話では、３８号と４１号に襲われた際に出来た傷は、幸いにも擦り傷と軽い打撲のみだったらしい。

「奇跡がこうも続くとは……」と彼は言っていたが、その時の彼は、彼女の命が無事だったことを喜んでいた。

無論、それは雄介や一条にも当てはまるのだが、今は目覚めない彼女への心配がその感情を上回っていた。

「ところで、会議の方では何か進展はありましたか？」

「突然現れた未確認生命体第６号と第２３号の対処に向かっていたため、会議はまだ行っていない」

自分の戦っている場所とは別の場所で未確認生命体が出現したと聞いた雄介は、表情をほんの少し険しくさせた。
「どうなりました？」

「君の言う通り、復活した未確認は以前戦った時のような戦闘を行わず、がむしゃらに暴れまわっていただけのようだ。銃弾の効果がないのは相変わらずだが、３９号の事件時に使用した超高圧ライフルや催涙弾の効果を強化した弾丸を使って追い返したという所だ。被害者が０人だったのは幸いだったが……」

「早く未確認を倒さないといけない……ですよね？」

雄介の決意を込めた瞳に、一条は無言で力強く頷いた。

そう、雄介も一条を含めた警察も、今回蘇った未確認生命体を一匹も倒せていない。

複数匹の行動により、雄介がいない場で未確認生命体が暴れていることや、警察側の人員が薄くなっていることを含めていることが原因とされているが、何よりも大きな原因は、現在の状況整理が全く出来ておらず、どのような出方をすればよいか、方針が全く定まっていないことにある。

未確認生命体に対抗する上で必要なクウガ、すなわち雄介との連携が成功できたのも、相手側の犯罪ケースを把握できていたからこそである。しかし未確認生命体の活動が連続で発生している現在、話し合うための時間など全くと言っていいほど無かったのだ。

それに加え、未確認生命体がただ暴れまわっているということは、未確認生命体自身が標的を定めず行動をしているということであり、こちら側が下手をすれば被害者の数が急激に増大することにもなる。

故に話し合う機会が出来れば、未確認生命体の活動や彼らの謎の行動、一般住民への避難の指示、戦闘態勢、そして今回の事件の黒幕とも言える未確認生命体についての対策を企てなければならない。

しかし、手掛かりが少なすぎる現在、対策案を出すのでさえも対策班内部で困難を極めていた。

「一刻も早くこの事件を解決しなければならない……そのためには、一体何が必要なのか……考えれば考える程、真相が闇の中に溶けていくように感じる……」

独り言のように呟いた一条の言葉が、静かな病室に響く。

「あの、一条さん……」

「なんだ？」

「なんていうか……別の考え方をしてみたらいいんじゃないかなって……」

雄介が言う、『別の考え方』という言葉に一条は眉をひそめる。

「別の考え方……？」

「さっき戦った38号なんですけど、鞭を使うのにすごく苦労していたんです。なんか、初めて鞭を使って戦うって感じで……とにか

く、戦闘が全くの素人っていうか……」

そう言われると、６号と２３号の戦い方もかなり滅茶苦茶に暴れまわっているような一方で、どこか動きにくそうに戦っている印象があった。

そのように捉えると、今回の事件で復活した未確認生命体全体は戦闘技術がかつてのものよりはるかに低くなっている可能性が考えられる。現に一条が６号と２３号に対して使用した超高圧ライフルや催涙弾のみで簡単に撤退していることも、かつての未確認生命体にしてみたら有り得ないことである。

「それに、主犯格の未確認の行動に対してもこれまでとは別の考え方を持って対策を考えることが必要だと思うんですけど……」

雄介の言う通りだった。現在、主犯格と思われる未確認生命体が行っていることといえば、雄介や一条ら警察が倒してきた未確認生命体の復活。この活動自身が最大の謎であることには違いないことだ。

長野県で第０号が起こしたと見られている未確認生命体の大量虐殺事件とは正反対の結果を導いているこの行動については、目的が全く不明なのである。

仮に何か目的があるとすれば、大量虐殺とほぼ同時に倒した未確認生命体を蘇らせた意図はいったい何なのか。

また、復活させた未確認生命体の戦闘が複数体同時に活動することと、戦闘能力を駆使して戦おうとしない理由についても何らかの関係があるのか。

これらの活動が、これまで未確認生命体が起こしてきた事件と全く関連性がないことが雄介や一条ら警察が事態を把握できていない大きな原因であった。

しかし、雄介の言うとおり、これまでの未確認生命体の動きと切り離して考えるとしたら……？

主犯格の未確認生命体が、これまで戦ってきた未確認生命体とは全く別の目的で動いているとしたら……？

過去の彼らの行動パターンや法則性にしばれれる事なく、この未確認生命体の行動についてのみを考えるとしたら……？

雄介の言う通り、別の見方をすることで事件の真相が見えてくる可能性だってあり得る。

「分かった、今後の会議でそのような考え方で捜査方針に変えられるかどうかを検討してみる。だが……」

一条はそこで口ごもってしまう。その視線の先には、ベッドの上で眠っている少女がいた。

「この子から、事情聴取するんですよね……？」

雄介が、悲しそうな顔をしながら、訊ねる。

先程言った捜査方針を固めるためには、やはり主犯格の未確認生命体の情報がほぼ無い現状では、不可能に近いであろう。

そこで警察が注目したのは、主犯の未確認が直接手を下そうとした

この少女だった。犯人の姿を最も近くで見ていたからこそ、有力な手がかりが彼女から入る可能性が最も高いということは雄介も重々理解している。

しかし、それはこの少女に再び事件の概要を思い出させることである。世間において、最も恐れられている未確認生命体に襲われた時のことを事件解決のために無理やり思い出させようとするのを、雄介は快く思っていなかった。

それで、この少女に再び悲しい想いをさせてしまうのだから。

無論、一条もそのように感じていた。しかし、警察であり、一般人の安全を義務としている彼は、そうと判っていても、実行しなければならないのだ。

未確認生命体の恐ろしさと、それが導く結果の悲しさを誰よりも重く受け取り、深く理解している二人だからこそ。

この悲しい決断を下すのに、戸惑っているのだ。

「その少女に関してだが、新しいことが分かったぞ」

突然、病室の入り口から声がした。そこには椿が、複雑そうな面持ちで二人を手招きしていた。

「記憶喪失……？」

椿の診察室に通された二人が真っ先に聞いた言葉がそれだった。

「それは、どういうことだ……？」

「あくまでも可能性の話だが、あの少女は記憶喪失になっている可能性が高い」

椿の言ったことについての理解が追いついていない一条が椿に問いかけると、椿は補足を加えた。

椿の話によると、昨夜彼女が運び込まれ、数時間が経過した後、彼女は意識を取り戻したそうだ。その際、深夜の見回りをしていた看護婦が廊下で歩いていた彼女を目撃し、夜勤で入っていた椿の同僚である医者が彼女に問診を行ったのだが、彼女はこう言ったそうだ。

『何も、思い出せない……』

これを聞いたその医者は記憶喪失の可能性があると判断し、この病院の専門医に詳しく診断してもらった結果、彼女は記憶喪失で間違いないらしい。

「昨日の未確認に襲われたことが原因なのか？」

「彼女の診断結果を見たら、頭部にも体内器官にも全く異常が見られなかった。専門医の視点から見ても、頭部への障害が記憶喪失の原因である可能性はまず考えられない」

「だとすると、残っている可能性って……」

「……精神的要因による、記憶喪失だ」

気難しい表情となった椿が、言い辛そうにつぶやく。

精神的要因で起きる記憶喪失に関しては、一条も雄介もほんの少し知識があった。あまりにも衝撃的なことがあった際に精神崩壊を防ぐために自己防衛機能が働き、発生するものだ。

未確認による外傷がない以上、それが記憶喪失の原因とみるので間違いはないが、そう捉えると彼女の身によほど衝撃的な何かが起きたと言う事に他ならない。

雄介と一条はそれを聞き、なおさら彼女のことが心配になる。主犯の未確認に関する手がかりがなくなったことなど、彼らの中では大きな問題ではなかった。

彼女はその悲しい出来事のせいで、自分が何者かも分からなくなってしまったのだから。

「椿先生！！」

椿の名前を叫びながら、一人の看護婦が診察室に入ってきた。何事かと思い、椿らは看護婦の方を見る。

「例の女性の患者さんが、少し目を離した隙に、またいなくなりました！！」

「なんだと……！？」

椿は驚き、声を荒げ、一条も目を大きく見開いていた。

そんな中、雄介だけは診察室を即座に飛び出していた。

「五代！！」

背後から聞こえる椿と一条の叫び声を無視し、雄介は少女を捜しに向っていた。

「……」

少女は、病院の中庭というところにやってきていた。清潔に整えられた建物の中に比べて、自然の環境を備え付けられたこの場所は、人工物特有の匂いがなく、自然のありのままの姿をこの身で感じることが出来る。人工物に囲まれた建物内の居心地の悪さが気にいらなかった彼女は、この場所を気にいっていた。

「……」

吹いてくる風を、心地よさそうに浴びる少女。しかし、風がやんだ

後、彼女の表情は暗くなっていた。

――どうして、また（・・）忘れてしまったんだろう……

海に歩いていった際にも幾度も繰り返された自問自答を再び行う。

忘れまいと決めていたのに、なぜ忘れてしまうのか。彼女は自身の無力さを恨んでいた。

大切だからこそ、覚えていなければならない。

覚えていなければ、あの人が悲しむから。

その人が自分自身を救ってくれた、自分自身を証明する大切な思い出だから。

――しかし、その大切な人の名前も思い出も、もはや覚えていない（・・・・・・）

自分が自分である証が手の内からこぼれていく。

不安でたまらなかった。

苦しくてたまらなかった。

自分を知っている人がいなくなることが怖い。

自分を、自分と呼べなくなってしまうことが怖い。
迫りくる正体の判らない焦燥と恐怖が、余計に彼女を不安にさせていたのだ。

「かえしてよ、それ！！」

「なにいってんだよ、これはおれのだろ！！」

「ぼくのだよ！！かえしてよ！！」

彼女が不安に押しつぶされそうになっている中、そのような声が聞こえた。

目の前に6歳ぐらいの二人の男の子がいた。片一方は同世代にふさわしい背格好で、もう一方は大柄で力も強そうな感じだった。

言い争いをしている彼らは、どうやら前者の少年のものであるボールを後者の少年が取ったことに対しての言い合いのようだ。

「……」

それを見ていた少女の胸の内から、不安からくる焦燥感が消え去っていた。

新しく生まれたのは……

一一二人が喧嘩するのを見たくない

二人の少年を思いやる、優しい思いだった。

しかし、少女がそう思った瞬間……

「うるさいんだよ！！」

力の強そうな少年が拳を振り上げた。次の瞬間には、もう一方の少年に向かい、容赦なく拳を振り落としていた。

もう一方の少年は、両目を瞑る。少女は間に合えと強く思いながら、駆け出そうとする。

しかし……

「ヨッ、ホッ……！」

それらの動きを、一瞬にして止めた男性がいた。

その男性は複数のボールを持っており、空中に投げていた。一つを投げたら、一つを受け取り。また投げると、今度は別の手でそれを受け取る。それを繰り返す。

その動作に、二人の少年は釘付けになっていた。それは少女に対して同様のことが言えた。

「ふう……」

やがて、その動作を終えた男性は、二人の少年に笑顔を向けてこう言った。

「ボールで遊びたいって気持ちも判るけどさ、それを二人でやってごらんよ。一人でやるより、もっともっと楽しいから！」

最後に「ね！」と言いながら、男性は拳に親指を立てた右手を少年達に見せた。

「うん！わかった！！」

その男性に対し、二人の少年は飛び切りの笑顔を向けてそう言った。その後、二人は遠くに走っていき、キャッチボールを始める。怒りで血走った目ではなく、本当に楽しそうな笑顔をお互いに向けながら。

それを満足そうに見届けた男性はやがて、こちらに向き直る。――先ほどの笑顔をそのままに。

「少し、深呼吸しない？」

こちらにその言葉を投げかける。そう言うと男性は「んー」と言いながら、両腕を精一杯伸ばし、体を反らし息を沢山吸い込む。そうした後、「ぶはぁ」と言いながら溜め込んだ息を一斉に吐く。

「君は君だから。どんな時でも、どんな君でも」

笑顔を絶やさず、すらすらと言葉をつなぐ。彼女は彼の言葉に自然と耳を傾けていた。

「だからさ、少しだけ休んでみようよ。それから、考えてみてもいいんじゃないかな？ね！」

少年達にやってみせた、拳に親指を立てた右手をこちらに向ける男性。

正直に言って、ほぼ初めて会った男性だ。それなのに、こちら側が何を考えているのかが判っているかのような感じで話してくることに、彼女は彼に対して疑問を抱いてしまう。

――だが、彼と接することによって、彼女の心にあった焦燥感や恐怖感は、いつの間にか消え去っていた。

さらに、少女は思い出す。この男性に話しかけられていた少年達もすぐに笑顔を取り戻していたことを。

そして、同時に気付く。

――この男性は、無意識のうちに、誰かの心をすぐに理解し、安心

させることができる男性なのだと。

「俺、五代雄介って言うんだ。よろしく！」

笑顔を浮かべながら、自身の名前を言う男性。そして、自分のほうに右手を差し出した。

見ず知らずの男性が何者かは判らない。

自分が失くしたものを、取り戻せる確証もない。

それでも、胸のうちに溢れる温かさをかみ締めるかのように。

彼の優しさに寄り添うかのように。

少女は、彼の伸ばした手を、そっと握り返していた。

EPISODE7　理由

ＡＭ９：１６　関東医大病院

「おーはーよーうーございます！！」

張りのある声を間延びかせながら、雄介はとある病室の扉を開けた。

「……おはよ、ございます……」

それに応えるのは、窓際のベッドに座っている少女だ。雄介の明るい挨拶に、少し眠そうな声で応える。それを見て、雄介は再びおはようと笑顔で返しながら、ベッドの横に置かれた対面者用の椅子に腰掛けた。

中庭での一件の後、関東医大病院の精神科医が、『精神的要因によって記憶を喪失した彼女には、心の状態のケアを施す必要がある』ということを、椿に告げていた。

そのことについては椿も理解していたため、早急に彼女の心のケアについてを二人の間で思案し始めたのである。

通常の記憶喪失である場合は、『記憶を喪失した人物にとって、身

近な人や光景を見せることにより、対象の人物が刺激され、その刺激により記憶を取り戻す』という方法を用いることで、記憶を取り戻すことができるとされている。

しかし、今回のケースでは少女に身近な人物が不明であるため、身近な人と合わせる方法に関しては行うことができない。

それに加え、今回のケースは精神的要因による記憶喪失である。彼女を精神崩壊寸前まで追い込んだ何らかの現象を探る術もないうえに、そのような方法を行うということは彼女を追い詰めることに他ならない行為だ。医者としてはもちろんのこと、人間としてそのような行為に走ること自体がありえないので、通常のケアとは異なった方法で行うように決定した。

また、彼女の精神状態も安定させ、それを維持させるようにする必要もあった。

記憶を喪失した人間は、喪失した記憶の部分を思い出そうとすることにより、脳に大きな負担をかけることになる。それが原因で、精神に疲労を蓄積させていき、その結果、精神状態が不安定になることが多々あるのだ。

未確認生命体に襲われたことで精神的にもかなり不安定である彼女には、出来る限り負担が少なくなるような治療を行う必要がある。

そのような話し合いから、椿はその精神面の安定の役目として、雄介を推薦したのである。

理由は、例の一件以来、彼女が雄介に対して、心を開いているとい

うことにあった。彼女とコミュニケーションを唯一とることができた雄介ならば、他のどの医師にさせるよりも、彼女の精神状態を安定させることができる可能性が高い。そのように目星をつけた二人の医師が、雄介に彼女と会って話をするように依頼したのである。

二人の医師の依頼を、雄介は二つ返事で了承した。

雄介自身も彼女のことが心配であったが、それ以前に彼女の面倒を診ることを彼自身が決めていたのだ。

――同情という安っぽい感情ではなく、本心から彼女と関わることを望んでいる。

医療に関して素人な雄介に依頼することに疑問を抱いていた精神科医も、雄介の人柄に触れ、彼を信頼し、治療を任せるようにしたのだ。

――そのように決まったのが、今から三日前の話。

雄介は、それから毎日、彼女の見舞いに来ていた。

「今日は、こんなものを持ってきましたー」

自身のポケットをガサガサといじくる。そんな彼の様子を、目の前の少女は、彼のポケットから何が出てくるのかを、ジッと凝視していた。

「ジャン！！」

嬉しそうに叫びながら、雄介はポケットをいじくっていた自身の右手を彼女にひろげて見せる。

「糸……？」

「そう、糸！！」

雄介の手の中にある物体を見てつぶやく少女に、雄介はやはり嬉々とした様子で返事をする。

雄介の手の中には、糸の両端同士を結び出来た、輪の形状の糸があった。その糸を両手の親指と小指に引っ掛け、両手の指に糸を引っ掛けてははずし、引っ掛けてははずす。

その行為を繰り返した後、雄介は静止した。雄介の両手の間には、先程までは輪だった糸が一つのオブジェを形成していた。

一言でまとめるなら、それは昆虫の『蚊』を模していた。

「ブウゥゥ〜ン……ゥウゥ〜ン……」

そのオブジェクトを、前後に動かしながら、蚊の羽音らしき音を口ずさむ。その音は、糸のオブジェを彼女に近づける度に大きくなり、遠ざける度に小さくなる。

少女は、そのオブジェを凝視していたが……

「スリランカのカ！！」

突然、そう叫ぶと雄介は両手を叩く。再び開かれた両手の間には、先程の蚊のオブジェはなく、代わりに両手の中間あたりに大きな結び目があった。

「ヨッ！！」

驚いている少女を横目に、雄介は再び両手を叩き合わせる。すると両手の間にあった糸はいつの間にか、消え去っていた。

その出来事に、少女は再び驚く。

「俺の、２０００の技のひとつで、あやとりでした！！」

そして、再びポケットに入っていた糸を取り出し、少女に向って言う。

少女はなおも驚きながらも、雄介の顔を見つめていた。それがしばらく続くと少女も、あやとりの糸に興味を覚えたのか、それを手に取り、自分もやり始めた。それをする彼女の顔を、雄介はジッと見つめる。

――少女の顔には、やはり笑顔は浮かんでいなかった。記憶を喪失している者にしか判らない、特有の感情があるのかどうなのかは、判らないが少なくとも今の雄介には察せないほどの様々な思いが彼女の中で渦巻いているかのように感じる。

それでも、雄介は少なからず安心していた。

不安定になりやすい状態であるにも関わらず、彼女の様子は非常に安定していた。少し前の彼女は、自分が何者なのかを探すのに必死で、常に何かに追われているように、焦っているように感じたのだ。

雄介は、そのような彼女を見ることが辛かった。

その迫ってくる何かが、例の未確認生命体だとしたら。

そう思う度に、雄介の胸がグッと詰まって苦しくなる。

「渚さん、検査の時間ですよ」

その言葉が、病室に響く。雄介と、目の前にいる少女――渚が病室の入り口に目を向けると、椿とその横に一人の看護婦が立っていた。

渚――記憶のない少女に対して、雄介がつけた名前である。

記憶を失っていて名前が判らないとはいえ、呼び名がなければ彼女を呼ぶ時に非常に不便である。椿や精神科医がそう言っていたのを聞いて、彼女をそう呼ぶようにと雄介が提案したのだ。

彼女が病院を抜け出した時、真っ先に海に向ったことを雄介は海が好きだと解釈し、そう名付けた。

海の最も近くで、それをずっと見つめられる存在――渚、と。

「それでは、渚さん、移動しましょうか」

看護婦の呼びかけに、渚は小さく頷いた。看護婦の手を借りて、立ち上がると、雄介の方をジッと渚は見つめる。

「大丈夫、ちゃんと待ってるから」

少々不安そうな様子で見つめてくる渚に、雄介そう言いながら笑顔を向ける。すると、彼女の表情から、不安そうな様子が消える。渚はコクンと頷くと看護婦と一緒に病室を出て行った。

「彼女とは、いい感じになってきたか？」

「はい、渚ちゃん、だいぶ話してくれるようになりましたし、大きな進歩って感じです」

渚が検査用の病室に入るのを見届けた後、雄介と椿は同じ階の大広間へと移動しながら話をしていた。椿は自分の診察室へ戻るため、雄介は渚の診断が終わるまで、大広間のテレビから未確認生命体に関する情報を集めるために、だ。実際のところ、雄介は一条から最新の情報が自然に入ってくるのだが、何かをしなくてはいられなかったのである。

「それにしても、お前との会話にも多少色気が出てきたって感じだな」

「え？」

「渚さんのことだよ。この後、デートに行くんだろ？」

椿はそのように言っているが、実際のところは目的が違っていた。

本来の目的は、渚のストレスを解消させるための外出を雄介同伴のもとで行うことである。彼女が二回起こした失踪騒動は、椿や精神科医、雄介の間では室内に閉じこもっていることが嫌いだったという理由で起きたのではと考えている。苦手なことを抱え込むとストレスが蓄積していき、結果的には精神が不安定になる要因にもなり得る。

そこで医師の両名からは、いくつかの条件の下で、渚を外出させ、彼女のストレスを発散させるという案が出た。

まず、毎朝行っている健康診断をパスすること。

次に、雄介を同伴させたうえで行うこと。

彼女が外出によって、ストレスを発散していないと判断できるのなら、今後の外出は極力控えさせるということ、の三つである。

そもそも、病院内にいることでストレスを蓄積させているという可能性がなければ、このような案は出されていなかった。と言うのも、未確認生命体に直接危害を加えられ、その症状が全くの不明である現在、彼女の身に何が起こっても不思議ではない。そのため、何が起きてもすぐに対応できる病院内にて生活をさせた方が遥かにリスクを低く収えることができるのである。

故に、今回の外出許可はあくまでも実験である。外出により、スト

レスを発散させることが出来れば、今後も少しずつ機会を与える可能性が生まれてくるが、出来なければ、今回のみとなる。医者としても、人間としても、あまりに高すぎるリスクを払うことになるが、それでもその結果により得るものがある。手がかりのない状況下で下したこの決断は、苦渋に苦渋を重ねた末の決断だった。

雄介を同伴させる点については、先程も述べた通り、渚が最も心を開いている人物であり、彼女の精神的負荷を軽くさせる目的が含まれいる。それに体調が急変した場合の連絡係の役割も果たすことが出来るし、万が一彼女の前に再び未確認生命体が現れた場合に置いても、雄介がすぐに彼女を安全な場所に避難させることが出来るためだ。

危険なリスクを払うぶん、その対策を入念に行った今回の外出は、この3日間で可能な限り万能性に富んだものへと変化していた。

それを任された雄介は……

「はい！！これからデートです！！」

いつも通りの柔らかい笑顔で、椿にそう返す。

暢気に答える雄介だが、彼自身が任された仕事の内容と重みは、彼が一番理解している。それでも、彼がいつも通りに笑っていられるのは、雄介自身が渚を守り抜くということに迷いはなかったからだ。

その真っ直ぐな笑顔に、救われた人が沢山いることを、椿はよく知っている。

故に。

雄介に渚のことを、依頼したのである。

「デートの心得を教えてやる……男がしっかりリードすることだ。そうすることで、女性は男性の頼もしさを見ることができる」

鼻と鼻が触れ合うまで顔を近づけた椿は、雄介の肩に手を置きながら低い声で話し出す。雄介は真剣に話す椿の顔を黙視していたが……

「プッ……」

「ククク……」

双方とも、笑い出す。

二人は、お互いを疑わない。故に、真剣に伝えなくても、いつも通りの会話で、相手に伝えることが出来る。

このように信頼できる相手が出来たのは、一条以来だろうか。

「じゃあ、邪魔者になる前に、俺は戻るよ。いい結果を、持って帰ってきてくれ」

最後に雄介の肩を軽く叩き、椿は診察室の方へと歩き出す。

「じゃあ、いい結果が出てから帰ってきますよ」

椿に聞こえるように、大きく言う雄介。その声の返事を返すように、椿はこちらを向かないまま、後ろ手に手を降った。

――本当に、いい結果を持って帰ってくる

雄介に、そんな信頼感を抱きながら。

『続きまして、未確認生命体関連の最新情報をお伝えします』

椿と別れ、同階の広間にきた雄介の表情が、テレビの報道により緊張感の張り詰めたそれに変化した。

広間に設置されたテレビにかじりつくように、テレビに最も近い座席シートへと移動し、腰を下ろす。

『警察や未確認生命体第４号によって死亡したはずの未確認生命体が蘇る現象が、東京を中心として、群馬、埼玉、新潟、静岡の各県にて確認されています。警察などの発表によりますと、今回蘇った未確認生命体は現在、第５号、第６号、第７号、第１４号、第１８号、第２１号、第２２号、第２３号、第２７号、第３４号、第３８号、第４０号、第４１号の計１３体が確認されており、現段階では更に多くの未確認生命体が蘇っている可能性を考慮し、未確認生命体合同捜査本部は早急に対策を練りだしている模様です。なお、蘇った未確認生命体は全員がバラバラに行動しているとみられ、外出

の際には注意をして出かけるようにして下さい』

そのニュースの発表した内容は、それのみだった。

結局、新たに判明したのは、復活した未確認生命体の種類が増えたことのみである。

（それは、そうだよなぁ……）

と、雄介は心中で呟く。警察でも掴んだ情報が全くない上に、その警察がそのような機密事項を公にさらすこともないのである。ニュースや新聞などのメディアから入るのは、既に雄介が知り得ているものばかりだ。そう思うと、雄介の胸の中にはなんとも言えない無力感が広がっていた。

『今回の未確認騒動の発端となった、群馬県山間部の事件の見解についても明快な結論は出ておらず……』

いつの間にかカメラがスタジオに移動し、出演者全員で事件に関する討論が行われていた。画面に映し出された大きなボードには、未確認生命体騒動の足取りと手に入っている情報の全てが書き写されていた。

それを見ながら、雄介は今回の事件の経緯を思い出していた。

事件の始原は、群馬県山間部における、大学生の男女合わせて三人が殺害されたことが切欠だった。

道路を照らす灯りも少なく、人がほとんど通らない山中をドライブしていた大学生達は、そのドライブの最中、何者かに襲われ、その命を落とした。

翌日、群馬県警と未確認生命体合同捜査本部の調べにより、事件の首謀者は未確認生命体と判断した。

しかし、ここで予想外のことが発生した。

被害者らの死因を調べてみると、全く異なっている。

すなわち、複数の未確認生命体が同時に活動を開始したということである。

この結果から、さらなる謎が浮かび上がってくる。

未確認生命体が複数で行動している点についてである。通常、未確認生命体はある一体が活動をしている間は、他の未確認は活動を控えているものである。

しかし、そういった法則を無視するかのように、複数の未確認生命体が同時に動き回っているのだ。これを考慮して、雄介や捜査本部も複数の未確認生命体との戦闘に対応できるように戦力の増加を図り始める動きを取ろうとしていた。

しかし、被害者の大学生の検死結果を見ていた椿がある驚愕の事実に気付く。一条ら捜査本部にそれが伝わると同時に、その事実が、最悪の形で現実となっていた。

かつて倒したはずの未確認生命体第６号が復活していたのである。さらには、第６号と戦闘を行っていた、クウガに変身した雄介の前には未確認生命体第４１号も現れたことも確認されている。

これらの情報を基に、椿は群馬県警に向かい、大学生三人の遺体を直接見てきた。結論、椿の想像は当たっており、その大学生の各々が復活した未確認生命体第２１号、２２号、２３号に殺害されていたことが判明した。これにより、これまで倒してきた未確認生命体が復活したという仮説は確証へと変わったのである。

「……雄介……？」

背後から、声がした。

「……渚、ちゃん……？」

雄介が振り向くと、そこには渚が立っていた。渚の背後の壁にかけてある時計に目をやると、既にニュースを見始めてから、３０分が経過していたことを知る。と、言っても大半は自身の記憶を辿るために費やしたのだが。

「もう、検査終わったんだ。どうだった？」

「……大丈夫って、言われた……だから、外に行ける……」

「そっか、じゃあ行こっか！」

湿っぽい空気を一変させるように、雄介は明るく言い放つ。

――今は、彼女のことだけを考えるようにしよう。

心中で、そう呟いた雄介は、先程感じた無力感を捨て去り、笑顔を浮かべながら渚を連れて歩き始めた。

ＡＭ１０：４２　警視庁　大会議室

防音対策が施されたその部屋には、大勢の人間が集められていた。

会議室一杯に設置された長机に、座る人間達の前には各々が所属している部署の名称が記されたプレートが置かれており、その数は軽く３０を越えていた。

プレートには、今回の事件の発端となった地域の管轄である群馬県警をはじめ、長野県警、静岡県警、栃木県警など復活した未確認生命体が確認された県の未確認管轄班の名前が記されていた。

彼らの視線の先には、会議室中に並べられた机とは別に用意された長机があり、そこには合同捜査本部、本部長の松倉とそれに並ぶ各署の重役達、さらに捜査本部の中で中心となっている一条と杉田の姿もあった。

『皆様、遠路はるばるお越しいただき、誠にありがとうございます』

重い腰をあげながら、松倉はマイクに向かってそう言った。

『今回発生した、過去に討伐したはずの未確認生命体が蘇生し、暴

れ始めた事件。この場では、未確認生命体事件始まって以来、最も困難な事件の解決策についてを、我々警察官が一丸となり、討論し合おうと思います。まず、皆様方には今回の事件に関して、これまでに判明した点を我々、捜査本部の方から説明いたします』

そう言い終わると、松倉が一条の方へと視線を向けた。それに頷くと、一条はスッと立ち上がり、天井から吊されたスクリーンの横に移動した。

『未確認生命体合同捜査本部の一条です。簡潔ではございますが、現段階で判明している物事について、説明させていただきます』

軽い前置きを述べ、一条は会議室に集まった関係者全員に手元の資料を見るように言う。それに記された写真と同じ映像がスクリーンに映し出された。

それは、今回の事件で復活が確認された未確認生命体の映像だった。街の防犯カメラの映像を抽出したためか、所々画質が荒い。

それと比較するように、同じ未確認生命体の生前の映像が映し出される。

この二つの映像の間にある相違点。

それは、生前の未確認生命体の腹部にあった装飾品を、復活した未確認生命体は身につけていないことであった。この事例は、これまで倒してきた未確認生命体のいずれにも該当しない特殊なケースとして扱われている。

また、倒してきた未確認生命体の中で唯一、復活を遂げた未確認生

命体第２６号のクローン体にもこのケースが当てはまっていることから、第２６号のような能力が未確認生命体全体にあるものとして、捜査を進めていくという方針も一時期、案として出ていた。

しかし、今回の復活した未確認生命体と同等の扱いをすることは考慮できない。

と、言うのも、復活した未確認生命体とクローン体との共通点が『腹部の装飾品がない』の一点のみであることと、２６号の復活した要因は２６号自身の能力のものであると科警研からの報告で判明しているためである。

さらに言うのであれば、今回の未確認生命体は第２６号のクローン体のようなグロテスクな外見ではなく、生前の外見のままでその姿が確認されている。

これらの点から、未確認生命体の復活は何か別の手法で行われたと判断を下したのである。

また、復活した未確認生命体には他にも注意すべき点がある。

復活した未確認生命体は、自身の主張とも言える人間の殺害方法が、自身の能力をほとんど使用しておらず、人間を殴打する形で襲撃しているのだ。具体的に言えば、過去と同じ方法で殺害された人数は復活した未確認生命体一体につき一人ということとなっている。

さらには、復活した未確認生命体の戦闘力が、科警研が開発した武器でも十分対応できるレベルまで低下していたことも確認されている。

外見だけではなく、行動パターンさえもを一変させた未確認生命体。それらが一体、如何なる手段によって再び現世に舞い戻ったのか。

その謎を解こうとする最中、ある一体の謎の未確認生命体が行動を開始した。この一体のみは過去に活動を確認されていないため、今回の騒動の主犯格、もしくは騒動の一端を担っている可能性が非常に高いと合同捜査本部は判断した。

仮に、この未確認生命体が他の未確認生命体を蘇らせているとしたら、長野で発生した大量虐殺事件と真逆の目的を持ち、行動していることに繋がる。

この行動が、大量虐殺事件とどのような関連性があるのか。

また、大量虐殺事件とほぼ同時期に活動を開始した理由は何なのか。

その目的、はたまた外見や能力、その全てが依然不明なままだ。

『そこで我々、合同捜査本部はこれまでの事件の情報を統合し、合同捜査本部の人員を三つに分け、捜査を進めていくようにいたしました』

一条の言う、三つのグループ。

それは、今回の事件を解決するために、考慮を重ね続けた捜査方針であった。

まず、第一に『行方不明となった青年を捜索するグループ』。

今回の事件の始原である現場から忽然と姿を消した青年は、最初の事件が発生した時から、依然消息を絶っている。この青年が、主犯

格たる未確認生命体と接触している可能性は非常に高く、また有力な手掛かりを持っている可能性も非常に高い。故に、この青年の行方を探れば、主犯格の未確認生命体についての情報も手に入れることが出来るというものだ。

第二に、『復活した未確認生命体と戦闘を行うグループ』。

いくら戦闘力が、過去のそれと比べて低下したとはいえ、その力は一般人にとって驚異なものである。しかも、複数の未確認生命体が同時に行動することを考慮すると、戦闘をする人数も大幅に増加させなければならないのは必然であった。

とはいえ、戦闘を行う警察官全員に科警研から支給された武器が行き届くわけではないので、現在はこのグループの中でもさらにいくつかのグループに分け、各グループの何人かに支給される形となっている。

そして、『過去の未確認生命体の行動とは別視点で事件を考察する』という第三のグループ。これが今回の事件において、最も重要なグループであった。

先に述べたとおり、復活した未確認生命体と主犯格の未確認生命体は、過去の事件で見せたものと全く異なった動きを見せている。これまでの行動を頭に入れたうえで、現在の事件を考慮することは、矛盾点の多さがありすぎるため、余計に混乱させる事態になった。

そこで、一端過去の行動パターンという概念を断ち切って、この事件を単独で考えるようにした。通常の事件においても、犯人の心情がパターン化されていれ場合が多いため、そのパターンに従って捜

査を進めることが多いのだが、パターンと異なった場合においては、対応が追いつかないケースも見られる。

それは、今回の事件においても当てはまっていた。過去の行動という思い込みを捨て、全て新しい状態から思考をスタートさせるというものだった。

しかし、これまでの活動を全て無視してしまう行為は捜査本部内でも批判の声が上がっていた。故に、このグループ内でもこれまでの事件の観点から見るものと、過去の出来事を本格的に断ち切って事件に臨むグループに分けることで、事態をここまで進ませることが出来た。

第一、第二のグループが体を使って事件に立ち向かう一方、第三のグループは知恵を使って事件に立ち向かう。比率的にはやや危ういかもしれないが、現存する戦力を考慮すると仕方のないことだった。

ちなみに、各グループリーダーは合同捜査本部内にて有力であった桜井、杉田、そして一条である。知識の面では未確認生命体との戦闘すらも遥かに凌駕させる一条が、知識側につくことには誰もが納得していたため、この方針が決定したとも言えた。

『これにて、私の方からの説明は終了させていただきます』

支給される武器の説明を軽く行った後、マイクに声を入れ終えた一条は一礼すると、松倉にマイクを渡す。

『復活が確認された未確認生命体は、日を追う毎に多くなってきている。確認されておらず、既に復活している未確認生命体もいる可能性が高い。これ以上、一般市民達の平和を脅かせてはいけない。

我々の全力を尽くして、必ず解決させる。各員、全力をもって、捜査にあたってほしい』

松倉からの発言を最後に、会議室にいた全員からは『ハイ』という力強い声が返ってくる。分けられたグループ毎に別れ、今後の捜査方針を告げられた後、全員が各々の行動に移り始めていた。

ＰＭ０：３９　神奈川県　横須賀海岸

病院を抜け、雄介と渚は海を見に来ていた。渚の心身にたまったストレスを解消させる際、どのような場所に行きたいのかを考慮した結果、彼女が失踪した際に真っ先に海を見に行ったため、雄介は海に行くことを渚に提案したのだ。

渚自身もその提案に黙って頷いたため、雄介は海岸までビートチェイサーを走らせたのだ。道中、後ろに乗せていた渚が何度か後ろに倒れそうになったことを除けば、彼女は非常に充実しているように見えた。

「……」

素足で砂浜に立ち、海の彼方を見つめる渚。安らかな表情で打ち寄せる波に近寄り、両足に波を浴びさせる。季節相応の水温の海水を、彼女は気持ちよさそうに浴びる。海を泳ぐ魚を見れるほど透き通った海水が、いっそう彼女を心地よくしているようにも見える。

そんな彼女を、ビートチェイサーを駐車させている道路脇のアスファルトのブロックに座りながら眺める雄介。

純粋に海を楽しむ彼女の様子を見て、雄介は柔らかい微笑みを浮かべていた。肝心の渚は笑顔を浮かべているのかは判らないが、それでも彼女の後姿は楽しそうに見える。少なくとも、彼女を海に連れてきたことで彼女の精神面に蓄積していたストレスは解消しているようだ。

この様子なら、今後も外に連れてくることが可能になるかもしれない、と雄介は考えていた。

『クウガ……』

「……」

その一方で、雄介は数日前の戦いを思い出す。

第３８号と第４１号との戦いの最中、クウガとして戦っていた雄介に向って、渚がそう言ったことを。

――現在存在する、事件の謎を解くもうひとつの鍵。

それが、渚だった。

雄介が彼女を初めて見た夜、彼女は主犯格の未確認生命体に直接危害を加えられた人物でもあった。不幸中の幸いにも、怪我をひとつも負わずに済んだのだが、その際のショックが原因で、今現在彼女は記憶を失くしてしまっている。

記憶を取り戻せば、主犯格の未確認生命体について何かを聞き出せるかもしれないが、事態はそれでは終わらない。

雄介が変身したクウガを、彼女がクウガと呼んだことが、今回の事件に大きく関わっている可能性を新たに生み出していたのだ。

そもそも、雄介が変身する戦士の姿をクウガと呼ぶということを知っているのは、ほんの数名程度、しかもそう呼ぶと発覚したのは、未確認生命体第3号が自身をそう呼んだことがきっかけであり、桜子が解読した古代の碑文にも、クウガを指し示すと思われる文字は『戦士』という単語で書かれている。

彼女がなぜ、クウガという名前を知っていたのか。

そして、なぜ彼女のみが主犯格と思われる未確認生命体に直接襲われたのか。

彼女に関する情報が、今回の事件に立ち向かおうとしている今、彼女の記憶が最大の鍵となることは間違いない。

そのことに唯一気付いている雄介は、それでも彼女が未確認生命体に関与しているとは、思いたくなかった。

「海、好きなんだ……」

ブロックから立ち上がり、渚に話しかける雄介。雄介の呼びかけに対し、渚はゆっくりと振り返った。

「判らないけど……なんだか、心が落ち着くの……」

「そうなんだ……」

雄介も、海を見る。

一つの濁りもない海水に映る青空を見ると、雄介もまた心が穏やかになるように感じた。

「あのさ……」

「……？」

「渚ちゃんは、自分のこと……どう思う……？」

言葉を少しずつ、口にするたびに。

胸が、少しずつ重くなる。

今、自分がしていることはひどく残酷なことだ。

記憶を失くすということでしか、自分を守れなかった少女に、そんな状態に陥れた元凶を思い出させようとしているのだから。

「……判らない」

「そっか……」

二人の間に、沈黙が走る。波の音がいやに大きく聞こえる中で、二人はずっと海を見つめていた。

「……でも……」

「え？」

「思い出さなくちゃいけないのは、判る……」

「……」

「時々、浮かんでくるの……よく判らないけど、昔見たような、懐かしい記憶が……」

ポツリ、ポツリと少女は話し出す。それを、雄介は静かに聴いていた。

「それを見ると、心がとても温かくなる……それが、私にとって、とても大事なものだってこともわかる……」

「……」

「でも、怖いの……」

自身の体を抱きしめながら、渚は震えていた。

「思い出すと……何かが壊れちゃいそうで……それでも、思い出さなきゃ、いけないと思うの……でも、怖くて進めないの……」

「いいんじゃないかな？」

雄介が、声をあげる。

渚は戸惑った様子で、雄介の顔を見上げた。

「……？」

「無理矢理、思い出そうとしなくていいんだよ。誰にだって怖いものはあるんだし、皆勇気を出すのはすっごく難しいんだから……」

「……」

「でもさ、前に進もうとするための勇気は、無理矢理出した勇気じゃなくてもいいと思う。君が本当にやろうと思ったときに出る勇気。それでいいと思うんだ」

「……」

「渚ちゃんもさ、きっとそう思える時が来ると思う。だから、今は臆病でもいいんだよ。思い出そうとすることが大事だって思ってるんなら、ちゃんと心の準備をしておかなくちゃ……ね？」

渚は、雄介を見つめる。それは、いつも笑顔を浮かべている、柔らかい笑顔が似合う彼が初めて見せた、真剣な表情だった。

「雄介も……怖かったの……？」

真剣で自分に向き合ってくれるからこそ、渚は訊ねる。

「え……？」

「あんな姿になって……よく判らない生物と戦って……雄介は怖くなかったの……？」

ずっと訊こうと思って、訊けなかった言葉。

笑顔が一番似合っていて、争いが最も苦手な彼には、その質問をすることは出来なかった。

それでも、訊こうとしたのは。

もっと、彼のことを知りたいと思ったから。

彼が、なぜこれほどにまで自分に優しいのかを知りたかったから。

渚は、雄介に訊ねることにしたのだ。

「……怖いよ」

沈黙の末、雄介が言った。

「……怖いの？」

「うん……凄く怖い。相手のこと思い切り殴ったりとか、蹴ったりとか……相手のことをどうしても苦しめなくちゃいけないのが、怖いんだ……そのことに、いつか俺もなれちゃうんじゃないかって思うことも、凄く怖いんだ……」

未確認生命体を倒すということ。

それを続けていながらも、雄介は心に痛みを抱え続けていた。

相手が、多くの人に涙を流させたとはいえ。

ただの快楽のために、人を襲い続けるとはいえ。

自身の拳で、未確認生命体が苦しむという行為を、やはり雄介は嫌っていた。

そんな行為がいつまでも続き、やがては何も感じなくなってしまうのではないか。そう考えると、眠れなくなることもあった。

「……じゃあ、なんで続けているの……？」

渚も疑問だった。

それほど、辛い思いをしながら、なぜ彼は戦い続けているのか。

自分自身を、根こそぎ失くしてしまうのではないかという恐怖に怯えながらも、なぜ戦い続けているのか。

「皆の笑顔を、守りたいから」

間髪入れず、雄介は応える。

「……皆の……笑顔……？」

「うん……」

その理由は、あまりにもちっぽけなものだった。

そんな、ちっぽけな理由のために、彼は自身の嫌っている暴力を使い続けているのだ。

「どうして……笑顔を守るの……？」

「これは俺の先生が言っていたことなんだけど……」

そう言って、雄介は話し始める。

自分が幼い頃、戦場カメラマンとして働いていた父が他界したこと。

悲しんでいた自分に、かつての恩師が言っていたこと。

『お父さんが死んで、確かに悲しいだろう。そういう時こそ、妹やお母さんの笑顔のために頑張れる男になれ。いつでも誰かの笑顔のために頑張れるって、すごく素敵なことだと思わないか？』

その言葉に感銘し、誰かを笑顔にするための２０００の技を作ると、誓ったこと。

しかし……

「それでも、やっぱり、俺は皆の笑顔が好きなんだ。だから、その笑顔を守りたい」

誰かに言われたからではない。

結局は、自分がそうすることを望んだから。

望んだことだからこそ、自分で立ち向かい、自分で歩いてきたのだ。

「じゃあ……」

雄介の言葉を聞いていた渚が、口を開く。

「雄介の笑顔は、どこにあるの……？」

「え……？」

突然の質問に、雄介は一瞬言葉を失う。

自身の嫌いな暴力を続け、自身の笑顔を封じてまで、誰かの笑顔のために戦う雄介。

そんな理不尽な世界で、彼の笑顔はどこにあるのだろうか。

渚は、純粋にそう思った。

「俺の笑顔は……皆の笑顔があるところ」

少し言い淀んだ後、雄介はそう言った。

「皆が笑顔だとさ、他の皆も笑顔になれるんだよね……」

そう言う雄介の顔は、少し哀しそうに見えた。

未確認生命体のせいで、多くの人が涙を流している。

何体も倒してきたのに、未だに被害者は増え続け、更に沢山の人の涙が流れている。

雄介は、そのことを純粋に悲しんでいた。

「だからさ、早く終わらせないといけないんだ。皆が、お互いに笑顔で笑いあう日のために……」

雄介は、それでも諦めていない。

たとえ、涙であふれていても。

それを、こえられないことはない。

いつか、皆が笑顔に戻れる日が来ると信じているから、彼は戦い続ける。

自分の笑顔も、もちろん大切だ。大切だからこそ、皆が笑顔を取り戻したその時に、一緒に喜びを分かち合う。

それまでは、もう少し我慢をしようと、雄介は決めていた。

「……」

それを聞いた渚は、黙り込む。

そして、顔を上げ――

「じゃあ、私も笑顔になる」

静かに、そう言った。

「今は、まだ無理だけど……いつか心から笑える日がきたら、雄介に笑顔をあげる……」

静かな、内に秘めた決意を渚は雄介に話す。

その瞳には、かつて見たことがないほど、強い決意が秘められていた。

「うん、頑張ろう！」

彼女の決意を秘めた言葉に、笑顔がこぼれる。いつも通りの笑顔を浮かべながら、拳に親指を立てた右手を見せる。

サムズアップ。

彼のシンボルといえる、古代ローマから伝わってきた、『納得のいく行動をしたものに与えられる勲章』。

それを掲げる雄介に対し、渚もサムズアップした拳を、雄介のそれに重ね合わせていた。

EPISODE8　解析

場所・時刻不明

気候の変わりやすい山中は、真っ昼間だというのにやけに暗かった。上空に出来た雲は分厚く、まるで空が迫っているような錯覚を覚えさせ、遠くの方で聞こえる野鳥のざわめきと羽ばたく音が、山中の印象をより不気味なものへと変化させる。

その山中の道を、一人の女性が歩いていた。ドレス風の洋服に、首に巻かれた白いスカーフと、肩にかけた白いストール――そして、額に刻まれた薔薇の刺青。

行くべき場所へ行き、その債務を終えたように彼女はもと来た道を、周囲の空間と異なった空気を放ちながら黙々と歩き続けていた。

「バルバ」

その女性――バルバのもとへ、約二メートルほどの影が舞い降りる。まるで鳥類のコンドルのように黒く、背中から生えたとてつもなく大きな翼がその影の内に秘めた強さを象徴しているかのようだった。

「ダグバは、どうした？」

怪人の姿から、黒ずくめの衣服と首から足先まである白いマフラーを纏った男性の姿に変えながら、それはバルバに話しかける。

「既に、向かった」

向かい合う男性に、淡々と告げるバルバ。それに対する男性もまた――淡々と告げる。

「奴が、動き始めているな……」

「どうでもいい、ことだ……が、邪魔な存在であることには、変わりない」

「様子を、見続けるのか……？」

「いずれ奴もダグバの手により、再び死ぬ。相手にする必要は、ない」

二人の言葉の対象である『奴』にも、バルバは興味を示すことなく、その場から去ろうとする。

「奴はもともと――我々と同じにして、我々とは相容れない存在なのだからな」

擦れ違う間際、バルバは男性に向かってそう言う。そのように言った彼女の表情もまた、冷淡だった。

「……」

そんな彼女に、男性は何も語らなかった。マフラーで隠された顔からは表情が読みとれないが、彼もまた、『奴』に対して、興味はない様子だった。

辺りで叫ぶ野鳥のざわめきがいっそう大きくなる山中を、二つの影は何の躊躇いもなく歩いていった。

ＡＭ９：３１　関東医大病院

「状態は、非常に良好だぞ」

椿は、診察室にいる雄介にそう告げた。

「本当ですか？よかったー」

それに対し、雄介は心底ホッとした様子を見せる。まるで九死に一生を得たような感じで、張り詰めていた頬の筋肉が一斉に緩む。

「肉体にも疲労は残らず、アマダムにも大きな変化は表れていない。金の力をあまり使わなかったことが大きなポイントになったな」

「いや、いつも通りに眠れるんですけど、いつも以上に寝たーって感じがするんですよ。今朝も、すっごくスッキリしてたし」

今日は、最近恒例となった雄介の身体チェックの日だった――と、言っても、雄介は近頃毎日ここに来ていたため、身体チェックも予定が空いている限りは、ほぼ毎日受けていたのだ。未確認との戦いが圧倒的に多い現在、雄介はクウガの力をいつも以上に使役しないといけなくなる。

その頻度が増せば、そのぶん負担が増え、結果的に雄介の身体に何らかの影響が現れる可能性が高くなる。

それを未然に防ぐために、雄介は自ら、椿にチェックを依頼してい

たのだった。

そして――椿の言う『状態は非常に良好』という言葉には、雄介以外にもう一人、対象となっている人物がいた。

「渚さんの精神状態も良好、いたって健康な状態だ。このまま退院してもいいぐらいにな」

それは、渚だった。

精神状態が危険な状態なるのを防ぐために、雄介と共に外出させるという、危険な賭けを含めた計画は――成功という形で幕を下ろした。今朝の身体検査にて、体調にも一切変化はなく、顔色も非常に明るかったそうだ。表情は相変わらずだったそうだが、それでも外出により得られたものは大きかったらしい。この結果をみて、今後も彼女の外出を検討するという声も、担当の精神科医から上がっているほどだった。

それを聞いた雄介は、自分の体調の結果について聞いた時よりも、嬉しそうな笑顔を浮かべる。そんな雄介の様子を、椿は苦笑いしながら見ていた。

「お前、自分の状態を聞いた時よりも嬉しそうだな」

「いえ、俺の時は良かった……って感じなんですけど、渚ちゃんの時のは、こう……良かったぁ！……って感じですかね」

前者の様子をホッとため息を漏らす程度で済ませ、後者の様子を全

身を使い、喜びを現す雄介。クウガに変身する彼をサポートする椿にとって、もう少し自身の体のことを重く見て欲しいと思うのだが、彼が常に他者の笑顔のために動く者であるとよく知っている椿は、何とも言えない複雑な心境だった。

「まぁ、渚さんのことを心配するのも大事だが、ほんの少しでも自分の心配をしろよ」

「はい、それは重々承知しています」

椿の忠告にも、軽い調子で返す雄介。実際には、彼自身も自分のことをしっかり考えていることを、椿自身も理解しているため、椿はこれ以上何も言わなかった。

「それより、もう一個大事な話がある」

苦笑いを浮かべていた椿の表情が一変し、真剣なものへと変わる。その緊張感が雄介にも伝わり、雄介の表情も椿同様、真剣なものへと変わった。

「お前は、現状をどう感じている?」

「……正直、全然分からないです」

雄介の答えに、椿は頭を掻きながらため息を吐く。

椿の質問の真意。

それは、主犯格の未確認生命体が何を目的に活動をしているのか、ということに他ならない。

現状としては、未確認生命体合同捜査本部が三班態勢で事件に臨んでおり、そのうち公の場に出ている情報としては、復活が確認された未確認生命体の被害状況、及び外出の際に注意を促すのみである。

確かに、未確認生命体自体の謎が未だに多いためそれらの活動についてを公の場に流すことで被害を食い止めるという対策に関しては、世間自体が未確認生命体の恐ろしさをしっかり理解しているため、問題視されている描写は殆どない。

――問題とされているのは、経過した日数である。

群馬県の山間部における行方不明事件を一日目とすると、事件が発生してから、既に8日間という時間が過ぎてしまっている。

そう。

その8日間という時間を酷使してさえ、合同捜査本部は事件の糸口すら見いだせていないのだ。

事件が長引けば長引くほど、被害者の数も増え、被害者の不安も積もっていく。

溜まりに溜まった不安は、人の笑顔を失わせ、理不尽な悲しみと怒りしか残らないだろう。

雄介は勿論のこと、椿もその一人だ。彼は理不尽な死を人に与える未確認生命体に強い嫌悪感を抱いている。被害者達の体を解剖する度に、その怒りと悲しみを内に燃やしていた彼は、それでも被害者を一人でも減らすために懸命に使命を果たし、未確認生命体関連の事件に大きく貢献してきた。

そんな彼が何も手を出せずに、ただ増えていく被害者達を見るのは、果たしてどのような心境なのだろうか。

その心は、雄介や一条ら、前線で戦っている者達に劣らないほど、凄まじいに違いない。

今回の主犯格である未確認は、そんな彼を嘲笑うかのように、未確認生命体を復活させ、自分の足取りを眩ませている。

椿は、そんな未確認の行動に怒りを――そして、焦りを感じていた。

「こんな状態では、正直、渚さんの身の安全を保証することは出来ない」

椿を焦らせている要因を、椿は口にする。その発言の意味を理解していた雄介の表情は、変わらずに固かった。

主犯格の未確認生命体に直接危害を加えられ、渚は数日間を過ごしていた。その期間は、未確認が復活した日の次の日からの一週間と、かなり長い。第４２号の事件の時は被害者の体に症状が現れたのは４日間と、その段階では最も長い期間を使用していたとされているが、今回はそれを上回っている。

しかも、第４２号はその期間中に、被害者達の精神に尋常ではないほどのダメージを与えていったにも関わらず、渚はこの一週間、全くそういった様子を見せていない。

その未確認が、彼女以外に危害を加えた様子がない以上、彼女の体調を観察する以外に、事件の調査に一役買うことはおろか、彼女を救う手だてもない。

かと言って、このまま彼女を放置し続け、彼女が死ぬのを待つことなど、到底出来ない。

身動きの取れない板挟み状態となっている椿は、言いようの知れない歯がゆさを口の中に溜め込んでいた。

「大丈夫」

そんな椿に、雄介は優しく言う。

右手でサムズアップをしながらそう告げた雄介の顔は、いつもの笑顔ではなく神妙なものだった――にも関わらず、彼の表情には諦めの二文字など全く無かった。

そんな彼の様子を、椿はポカンとした面持ちで見ていた。

「椿さんも、俺も、一条さん達も、みんな必死に頑張ってますから」

「……」

「それに、一生懸命頑張っていないと、見えるものも見えなくなっ

ちゃうと思います。だから、今は少しでも頑張らないと」

最後に「ウン」と頷きながら気合いを入れる雄介に、椿は吹き出す。その彼の表情は、先程までになかった明るさがあった。

――どこまでも、不思議な奴だ。

椿は、そう思う。

彼が言うと、自分も自然に頑張ろうと思えるのだから。

「じゃあ、俺も頑張るか」

そう言いながら、椿も右手でサムズアップをする。それを見た雄介もまた、笑顔を浮かべ、サムズアップを返していた。

ＡＭ９：５１　警視庁

部屋の前にかけられたスクリーンに映し出された映像を、一条は凝視していた。彼のスーツはかなりくたびれている上に、証明が暗いが彼の目元にはうっすらと隈が浮かんでいる。

そして、彼の横には高く積み上げられた二十本を軽く越える量のビデオテープ。それぞれには各県警の名前、日付、場所が記述されており、いずれにも共通して書いているのは、『防犯カメラ』という文字だ。

「お前、また徹夜か」

「今は、少しでも多くの情報が必要です。眠っている場合ではありません」

映像を見ていた一条の横に、部屋に入ってきた杉田が立つ。一条は杉田の声に応えつつも、やはりスクリーンに映し出された映像を凝視し続ける。そんな彼に、「ぶっ倒れたら、元も子もないんだぞ」と、杉田はぽつりと呟いた。

「それで、そちら側で何か判ったことはありますか？」

映像から一旦視線を外し、杉田の方へと向く一条。杉田は苦い顔をしながら、胸ポケットにしまった警察手帳を取り出し、パラパラとめくる。

「八方塞がりだな。手がかりらしい手がかりがまるで見つからない。だが、ひとつ妙なことがあった」

「妙なこと？」

眉を寄せる一条に、杉田は警察手帳の一ページを見せる。覗き込んだページには、この一週間で出現した未確認生命体の番号が記載されていた。

１日目：第６号　第４１号
２日目：第６号　第２３号　第３４号　第３８号　第４１号
３日目：第５号　第７号　第１０号　第１４号　第１８号　第３４号
４日目：第５号　第２１号　第２７号　第４０号

５日目：第７号　第１４号　第２２号　第２７号
６日目：第２１号　第２２号　第４０号

これを見た一条は、より一層表情を厳しくする。

――最初の頃に出てきた未確認生命体が、後の方では出てきていない当初の見解では、主犯の未確認生命体が何らかの目的のために、戦力を確保することが、その活動理由だという声があがっていた。

しかし、この情報を見る限り、復活した未確認生命体全てが同時に出てくることもなく、しかも、２回ほど我々の前に姿を現した後は、姿を現さなくなっていることから、これまでと同じように我々人間を殺すことが目的とは考えにくい。

仮に、今回の未確認が行うゲームが『復活させた未確認生命体を使って行う』ということだとしたら、復活させた未確認生命体全部を使った方が明らかに効率がよいだろうが、それを行わず、数体が交代しながらただ暴れまわっているのみなのだ。また、このような明らかに効率の悪い動きをするよりかは、自身の手で行えばいいのにも関わらず、主犯格の未確認が動きを全く見せない。複雑なルール、すなわちそれらが経験したことのなかった人間社会に紛れ込み、その社会の中でゲームを進めるようになった高い知識を持つ未確認生命体が、そのようなことをするとは、到底思えなかった。

これらの理由から、一条は今回の未確認生命体は、これまでの未確認生命体とは異なり、殺人目的で動いているとは考えにくい。

そう考えれば、今回の未確認はこれまでの未確認とは異なった考え方を持ち、団体で決められたルール通りに行動していない可能性も考えられる。現存する未確認生命体全てではなく既に死亡した未確認生命体を戦力として使役しているのは、大量虐殺事件を始めた未確認と真逆の動きをするためだと考えると、その可能性は十分に考えられる。

未確認生命体の能力を持ちながら、未確認生命体とは異なった考えを持つ者。

あるいは、未確認生命体の能力を持った、新しい勢力。

そのどちらかが、動き回っていると考える方が、現在の状況では自然なのである。

「……そいつはその力を使って、俺達に何をしようとしているんだ……？」

目的が判らない以上、合同捜査本部も未確認の動きを先読みして動くことが難しい。しかも、その目的がこれまでのように、殺戮という名のゲームでないのだから、杉田は余計に不気味に感じていた。

「それのヒントを得るために、今回の捜査管轄にあたった方々に、その地域の防犯カメラの映像をお借りしたんですが……」

「何か、判ったのか？」

「手がかりとは言うには程遠いかもしれませんが、復活が確認された日にちとその場所から、主犯の未確認の足取りを探ってみたんで

すが……」

一条はそう言うと、近くにあったホワイトボードに張り付けられた巨大な地図に向かう。そして、発見された未確認の番号と日にち、確認された数を見つかった順に、細かく記載していく。

1日目：群馬県　21　22　23　計3匹
2日目：埼玉県　6　38　41　計3匹
3日目：新潟県　5　14　計2匹
4日目：茨城県　18　40　計2匹
5日目：静岡県　7　34　計2匹
6日目：千葉県　8　27　計2匹

「えらく、バラバラだな……」

一条が書き終えた文字を見ながら、杉田は呟いた。

実際にその存在が確認された県があまりにもかけ離れている。一日単位で移動を続け、主犯の未確認は、他の未確認の復活を続けている。実際にはさらに多くの未確認が復活している可能性が高いが、それでも移動する距離が大きすぎるのだ。

しかも、この移動自体も非常に効率が悪い。1日目から2日目の移動はまだ判るが、それ以降はそれぞれが隣接した県ではないうえに、方向もバラバラだった。

移動すること自体は、未確認生命体第36号が電車を使っていたために不可能とは言い難いが、こうまでも不規則に動き回ること自体が意味不明である。目的の真相ならまだしも、その概形すらも見え

てこない。

「この移動にも、何か意味があるって言うのかね……」

もはや投げやりな様子で思考を続ける杉田。連日の未確認騒動により、相当疲れている様子だ。

その中で、一条はホワイトボードをジッと見つめていた。

『別の考え方』

数日前、雄介が言っていたことを思い出す。

ここまで過去の未確認と異なった活動をする今回の未確認生命体。これまでに積み上げてきた知識は勿論、これまでとは異なった考え方を持って事件に臨まなければならない。

故に、一条は思案を練り続ける。

――何故、離れた場所に？

――そこでしか、出来ないから？

――場所が固定されているなら、なぜここまで効率の悪い移動をする？

――なぜ、効率のいいやり方をしないのか？

「まさか……」

「どうした？」

とある考えが浮かんだ一条に、杉田が話しかける。

「主犯の未確認がなぜこのような移動をするのかについてですが、もう一つの可能性がありました」

「もう一つの、可能性……？」

「――何かを、探しているのでは……？」

「探す……？」

一条の発言に、杉田は首を傾げた。

これまでの未確認の行動――それは、人を殺すということに大差がなかった。最近では、設定したゲームのルールに合った人間を捜すということも行動の要因に含まれているが、それでもその根本には、人を殺すことが前提となっている。

ところが、今度の未確認はどうだろう？何らかの目的があるにしろ、自らが人を殺すための行動をしているようには思えない。復活した未確認が確認された場所には、人がほとんどいない場所もいくつかあるためであり、本気で人を殺すことを目的とした行動なら、少なくとも東京などの都会で行うはずだ。復活した未確認の手により多少なりとも被害者はでているものの、自分の手で人を殺害すること自体は一切行っていない。

これからの点から、一条は今回の未確認には殺人ではなく、何か別の目的を持ち、行動しているのでは、と考えていた。

そう考えると、効率の悪い移動の説明についても、かなり強引だが、結びつけることができる。何かを探す――即ち、それを求めるためにあちこちをさ迷っていると考えれば、この未確認の行動も、かなり規模の大きい迷子の動作のように見えなくもない。

無論、そんなことはあり得ることではないと、言い出した一条自身も感じていた。だが、その強引な考えが一番しっくり来るのもまた事実であることに違いないのである。

現に、それを聞いた杉田も苦い顔をしていた。あり得ないとは思いつつも、それを否定することも出来ない――その、強引な仮説の信憑性はあまりにも大きかったのだ。

「だが、それなら……奴は一体、何を探してるんだ……？」

杉田の質問に、一条は無言で首を振る。強引な仮説は、それを決定付けるものが何も無いため、仕方ないと言えばそれまでである。

しかし、それが最大の謎である。これまで奇妙な行動を続ける未確認が、一体何を探しているというのか。

こうまで手掛かりが何もない状況だともはや神にすがりつきたいとも思うのだが、幸いにもまだ宛はあった。

始原の地、九郎ヶ岳遺跡で発掘された碑文である。

碑文には、これまでに戦士クウガについての記述や碑文を書いた一族のリントと、それらと敵対していたグロンギ（現世でいう未確認生命体）などの民族文化、さらに桜子が発見した『凄まじき戦士』に関する文章が残されていた。

この碑文は、リントの一族が未来にてグロンギの封印が解かれた時のために、グロンギへの対処法を記すことを目的の一つとして作られたとされている。ならば、この碑文の中にグロンギを復活させる存在についての記述がないかを、長野県警にいる桜子に調べてもらうことが出来れば、何か発見があるかもしれない、と一条は踏んでいた。

一条の筋が通っている案に、杉田はただ頷くことしか出来なかった。情報が手に入る可能性は低いとはいえ、今は少しでも情報が必要な時だ。四の五の言っている時間など全く無いことは、杉田にも判っていた。

「判った。こっちはこっちで色々当たってみる」

「お願いします。ところで、何か桜井さんから連絡はありましたか？」

「定時報告以外には何も無しだ。人員増加、それに捜査範囲を拡大してはみたものの、引っかかるものすら見つかっていない」

「そう……ですか」

杉田の発言に、一条は視線を落とす。

これだけ時間をかけているのに、行方不明になった青年の手掛かり

を全く掴むことが出来ない。これ以上、時間をかければ益々手掛かりは消えていくだろう。

一条ら警察の中には、ただただ不安と焦燥感が募っていた。

その時、一条の携帯がけたたましく鳴り響いた。

「はい、一条……亀山か」

電話の主の名前を呼ぶ一条。

『一条さん！今すぐ報告したいことがありまして！』

「落ち着け、一体何があった？」

取り乱した様子で話し続ける亀山を、宥める一条。――しかし、その取り乱し方はあまりにも大きい。電話越しでも、十分分かるほどに、だ。

『実は、長野県内で別の行方不明事件を追っていて、事件現場付近の防犯カメラを確認していたんです。そうしたら、カメラの中に、なんと言えばいいか、やけに人に似た馬鹿でかい生き物みたいなのが移っていて……』

人に似た馬鹿でかい生き物。

その発言に、一条は強く反応した。

「亀山、その画像をこちらに送ってくれ！大至急だ！」

『は、はい！』

携帯の通話を切らずに、指定のアドレスを亀山に告げながら、一条は画像が届く場所へと足を走らせる。その後ろを杉田も走りながら追いかけていく。

ほんの十数秒後に目的の部屋に到着した一条と杉田は、すぐにパソコンをチェックする。すると画面には一件のデータが着信していた。一条はすぐにそのデータを開く。

そこには、異様なものが移っていた。

木の生えた山道、遠くに見えている川は別にどうにも思わない。だが、画面の右端に映っているのは、確かに人間の形をした、しかし人間とはかけ離れた異形だった。

人間でいう顔面と体の縦半分は映っていないものの、腕、胴体、足、そのどれもが人間では無かった。しかも、その異様さを現すように――いつか、雄介が言っていた黒い靄のものを纏っていた。

「これは……」

「こいつが、今回の未確認……！」

一条と杉田は、その異様な姿をこれまでの経験から、一瞬で未確認生命体であると断定した。

「亀山、この映像はいつ、どこのものだ？」

一条はその存在を確認した後、再び亀山へと話しかける。

――だが、電話口から聞こえてきたのは、衝撃の一言だった。

「……なんだって…！？」

その衝撃に、一条は表情を驚愕のものへと一変させる。そして、亀山からの連絡が終わったのか、一条は通話を切り、力なく胸元のポケットへと携帯を終い込んだ。

「どうした……？」

一条の様子がおかしくなったことに疑問を覚えた杉田は、彼に問いかけた。

「それで、この画像が撮られた時間と場所は……？」

「……」

杉田の問いかけに、一条は放心状態だった。しかし、一条は徐々に亀山から得た情報を口に出していた。

「撮られた時間は、響から9日前……」

その発言に、杉田もまた驚愕する。その日にちは、未確認の復活が確認された日の2日前なのだから。

「なに……？」

「場所は、K－47地点……」

「九郎ヶ岳遺跡付近です」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2183q/

仮面ライダークウガ-New Hero Unknown Legend-

2011年10月8日12時17分発行